TZ PERFECT ANSWER and the sequel to a movie

雪村 小百合

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GANTZ PERFECT ANSWER and the
sequel to a movie

【Nコード】

N1399T

【作者名】

雪村 小百合

【あらすじ】

「GANTZ PERFECT ANSWER」を見に行った女子高生が、ガンツの世界にトリップする物語です。

映画沿いのためネタバレになりますが、映画の内容をすべて暗記しているわけではないので、セリフが違うなどの相違点が出るかもしれません。

登場人物紹介（前書き）

登場人物の紹介です。

映画のパンフレットより、抜粋あり（省略部分あり）

登場人物紹介

村上詩織・・・友人である舞とガンツの映画を見に行つて、その帰りにトリップしてしまつた高校生。嵐の中では、大野のファン。

松村百合子・・・トリップした詩織を拾い（？）、同居している女性。職業は不明。一人暮らしなのに料理などができず、詩織のトリップ後は、家事は詩織が担当している。

玄野 計（二宮 和也）・・・東京都内の私立大学に通う就職活動中の4年生。大学では目立たない存在で、周囲から存在感の薄さをバカにされている。地下鉄で、幼馴染である加藤の手助けをしようとして電車に轢かれ、ガンツに召還される。

加藤 勝（松山 ケンイチ）・・・小学生の弟と二人暮らしの生活を支えるため、高校や大学にも行かず働く22歳。玄野は小学生の時の幼馴染で、当時の加藤にとっては憧れの存在だった。玄野と共に電車に轢かれ、ガンツに召還された。

小島 多恵（吉高 由里子）・・・玄野に好意を寄せる大学の同級生で、玄野を主人公のモデルにした漫画を寄せている。

加藤 歩（千阪 健介）・・・兄の帰りを待つ健気な弟。

西 丈一郎（本郷 奏多）・・・玄野や加藤が来る前からガンツの世界でミッションを経験していた高校生。ガンツの世界の知識が豊富で、非常に冷酷な性格。仲間を囿にして戦う。

鈴木 良一（田口 トモロヲ）・・・リストラされたサラリーマン。

玄野と加藤を信頼し、共に闘う。

重田 正光（山田 孝之）・・・《死んだはずの人間》と黒い玉の真相を追う刑事。

岸本 恵（夏菜）・・・自殺をはかりガンツに召還された女性。

北倉 玲子（戸田 菜穂）・・・重田の同僚の刑事。

栗田 舞・・・詩織の高校のクラスメート。一緒にガンツの映画を見に行っていた。嵐の中では、二宮のファン（だからガンツを見に行った）

一話

「はぁ・・・グロかったね」

「一作目以上にね・・・」

最初からため息でごめんなさい。私、今友人とガンツの映画を見に行ってきたところなんです。

いやぁ、グロかった。本当に、グロかった。

あ、私の名前は村上詩織。で、友達は栗田舞って言います。

「・・・ってか、ニノラストシーンで髪の毛あったね。玉男・・・だっけ？アイツの頭禿げてたからってつきり禿げるのかと・・・」

「や、ニノが禿げてたら別の意味で悲鳴あがるよ？」

ってか、私個人的に見たくないんだけど。ニノの禿。そんな風に映画の感想を話していたら、電車が来た。

「あ、来た」

私たちは、電車に乗り込む。

「・・・なんか眠い」

「そう？」

不思議そうに言う舞に頷き、私は目を閉じた。

「私寝るわ」

「そう？私、黙って降りちゃうけど」

「いや。終点だし、起きなかつたら駅員さんが起こしてくれるよ」

「そういう経験は結構ある。学校帰りとか疲れて寝ちゃうんだよねえ・
。。。」

「お客さん、終点ですよ？」

その声で、私は目を開けた。

「気が付きました？終点ですけど、大丈夫ですか？」

「はい・・・ここで降りる予定だったので」

そう言って立ち上がり、荷物を持って駅員さんに頭を下げる。

「すみません、迷惑かけて。ありがとうございます」

「いえいえ。お気をつけて」

そんなやり取りをして電車を降りると、何か妙な感じがした。うまく言えないけど・・・違和感がある。駅名を何気なく見ると、いつもの駅。・・・改装とかしてたっけ。不思議に思い、改札に向かって歩く。

(あれ・・・?)

ふと、首を傾げた。

(こんなところに自販機なんてあったっけ。・・・あれ?あそこにあった自販機は?もしかして、移動した?ってか、あの弁当屋名前変わったるし。・・・おかしいな)

不思議に思いながら改札を出ると、知らない風景が並んでいた。

(え、何ここ!)

二話

取り敢えず、携帯電話を取り出した。

アドレス帳から、一つの番号をクリック。

トゥルルルルル・・・トゥルルルルル・・・。

《この電話番号は、現在使われておりません》

「え・・・」

使われてない筈はない。

映画の時に電源を切った舞の携帯は、いつものもの。

「何がどうなってるのよ」

私は、頭を抱える。

「・・・どうしたの？具合悪いの？」

しばらくしゃがみ込んで居ると、誰かの声が聞こえた。

「・・・誰、ですか？」

「あ、私は松村百合子。・・・具合悪いなら、送っていききたいけど。」

「・・・無理ですよ・・・」

「え？」

「私、帰るところ、無いみたいだから」

自分で言うとおいて、泣きそうになった。

「どづいづこと？」

「分かりません・・・」

分からないし、言ったところで信じちゃ貰えないだろう。

「・・・じゃ、行く宛が無いってこと？」

「そづいづことですね」

何だか他人事みたいだ。

私自身のことなのに、変なの。

「・・・じゃ、ウチ来る？」

「はっ？」

「だって、放つとけないし。アンタまだ高校生でしょ？」

「そうですね。．．．え、良いんですか？私、怪しいんじゃない．．．」

「そりゃ怪しいわよ。駅の隅っこで座り込んでるんだもの」

．．．やっぱり、怪しいか。

「でも、放っておいたら餓死しそうですもの。だから、ウチに来ないか、って誘ったわけ。．．．理解した？」

「あ．．．はい」

「で、返事は？」

「．．．．．よろしくお願いします」

私は、深々と頭を下げた。

三話

あれから一週間。

私は、百合子さんの家で暮らしていた。

「はい、夕飯出来ましたよ」

仕事を終えた百合子さんに、私は夕飯を並べる。

自分の分も用意すると、私たちは食事を開始した。

今日のメニューは、親子丼と、豆腐とワカメのみそ汁。

「相変わらず美味しいわね」

「それはどうも」

彼女と生活して驚いたこと。

一人暮らししてるのに料理が全く出来ず、インスタントやコンビニ弁当ばかり食べていたとは……。

身体に悪いと怒鳴り、私は料理をすることにした。

「明日の朝はパンとご飯どっちが良いですか？」

「んじゃ、ご飯。和食が良いー」

「了解しました」

彼女は私に何も聞かなかった。

何処に住んでいるのか、何故あんなところにつずくまっていたのか……。

「じゃ、風呂沸かしてくるからー」

百合子さんは、食器を片づけて言った。

「あ、お願いします」

そう言っつて自分の食器を流しに持っていき、百合子さんの分と一緒に洗った。

「ふう……」

私は、湯船に浸かりため息を吐いた。

さつきも伝えたように、百合子さんと出会って一週間。だけど、ここが何処なのかさっぱり分からなかった。

夢小説にあるような異世界トリップではないかと思う日もあったが、漫画の舞台となる地名がサッパリ分からないから確認のしようがない。

「なんで、誰にも繋がらないんだろう」

アドレス帳に登録した全員に電話とメールをした。

だけど電話で聞こえるのは機械的な声だし、メールの返信は「メー

ルは届きませんでした《というもの。
試しに百合子さんの自宅にかけたら繋がりに、逆に驚いた。

「あーあ、謎だらけ」

私、このまま百合子さんと暮らすのかな……。
百合子さんは嫌いじゃないけど……。ずっと迷惑を掛けてちゃ不味いよなあ。

次の日、私は百合子さんに頼まれスーパーに来ていた。
タイムセール時間、仕事で行けないらしい。

そう言えば、百合子さんって、何の仕事してるんだっけ。

その思考は、信号の音で遮られる。

(それにしても……)

「重い……」

買いすぎた。

「他にも安いのあるから買って良いよ。」

百合子さんの言葉に甘えて、今日の夕飯と明日の朝食にはセール商品を使うことにする。
でも……。

「やっぱり、買いすぎ「泥棒ーっ」え、泥棒!？」

慌てて声の方を向くと、一人の男が走り寄ってきた。

「邪魔だバカヤローッ」

え、邪魔って言われても。

固まってる、脇道に押し出された。

ーパーン。

目の端に、車が見えた瞬間。
私は、車に跳ねられていた。

四話

「……あれ？」

目を開けると、そこは部屋だった。

「何で……？」

私、車に跳ねられたのに。

「……初めまして。いきなりで悪いけど、大事な話があるんだ。良いかな」

顔を上げると、そこには……二宮和也が居ました。

「えっと……その前に、お名前聞いても良いですか？」

「俺は、玄野計って言います。貴女は？」

「村上詩織、です」

玄野計、つてことは……ガンツう！？

「ここに来た人は……大丈夫ですか？」

頭が真っ白で聞いてなかったが、にの……や、玄野計さんはわざわざ説明してくれていた。

「あ、はい。大丈夫です」

「そう？じゃ、続けるけど・・・とりあえず、全員揃ったらラジオ体操の歌が《あたらしいあさがきたきぼーうのあーさーだ》・・・始まったか」

ため息を吐いて、玄野さんは私の手を握って立たせてくれた。

玄野さん、紳士だ・・・！

《てめえ達の命はなくなりました。新しい命をどう使おうと、私の勝手という理屈なわけだす》

ラジオ体操の歌が終わると、黒い玉に文字が現れた。

「・・・」

想像してた通りにも程がある。

「あの玉は、ガンツって呼ばれてる。俺やその前に来ていた奴も、そう呼んでる」

「・・・ガンツ・・・死んだ人間を利用して、何を・・・？」

「星人を倒す。そのための武器とスーツはこれ。・・・君のは、これかな」

《しおり》

スーツケースに、そう書かれていた。

《帰りたいかったら、この方をやつつけて下ちい》

《砂糖星人》

《特徴：微妙に強い》

《好きなもの：砂糖》

「皆さん、ここには良く？」

「ええ。・・・星人は俺たちを殺そうとします。俺たちは、逆に星人を殺さなきゃいけない。・・・戦争です。とにかく、転送の前に転送、始まりましたよっ」「え、もうですか!？」

玄野さんを見ると、おじさんの手がない。

「・・・グロ・・・」

実際見ると余計に。

「これから何処かの町に転送・・・移動します。スーツは渡しておきますから、到着したら人気のない所で着替えてください。ちなみに、下着も脱がないと着れません」

「・・・マジですか」

「大マジです・・・あ」

玄野さんの足が消えていく。
見ると、私の手も消えていた。

「え、違和感全くないって逆に怖いんですけどっ」

「大丈夫ですよ」

優しく笑う玄野さんは、完全に見えなくなった。
瞬間、私の視界も変わる。

「何処ですか、ここ・・・」

「分からない。でも、日本であることは確かだよ。・・・あの路地で着替えておいで」

「じゃあ、あたしが見張ってあげるわ。・・・あ、あたし坂野理沙よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

二つの意味で。

だって、覗かれたら嫌だもん。

大通りの入口に、坂野さんが私に背を向けて立つ。

私は、大急ぎでガンツスーツに着替え・・・結構大変だな、これ。スタイルが丸分かり。

(・・・お腹出てないよね?)

私は不安になった。

五話

「それで……これからどうするんですか？」

着替え終わった私は、玄野さんに聞く。

「星人を探します。最初ですから、見るだけで構いませんよ。・
・慣れたら、手伝って下さいね」

「慣れたら、考えます」

あんなグロい戦い、私には無理だ。
でも、もうそれどころじゃなくなるだろう。

「……じゃ、行きますよ。ってか、ガンツのやつ着替えの時間用意した？」

「え、そうなの？」

「いつもなら、転送が済んだらすぐ星人が見つかるんですよ。着替え終わるまで周りを確認してたけど、星人らしきものは見当たらなかったから……」

……なんで？

いや、嬉しいけど。

「居たわよ、星人」

坂野さんの言葉に、全員（私は含まない）が銃を構えた。

・・・つて、私銃持ってないよ？

「詩織さん、これ。貴女の」

玄野さんが銃を二つ持っていたのか。

「・・・ありがとうございます」

お礼を言ってる間に、星人は逃げていた。

・・・ネギ星人みたいな展開だな・・・。
つてか、なんで砂糖？

「坂野さんと若葉さんは詩織さんのガードをお願いしても良いですか？」

玄野さんの言葉に、二人は頷いた。

・・・なんか申し訳ないな。

「じゃあ、行きましょう」

玄野さんは、そう言って走り出した。

それに倣い、他のメンバーも走って行く。

「さ、詩織さんも急いで」

「え、ああ、はい」

鈴木さんの言葉に頷き、私は走り出した。

・・・私、体力ないのに大丈夫かなあ・・・。

「今回は、三体ですか」

え……。

「三体？」

「星人の数ですよ。……ホラ、あそこあそこに。後はあっちに居るでしょ」

「あれを全部倒せ、と？」

「ガードしますから、大丈夫ですよ。……玄野くん、どうします？」

「取り敢えず、気付かれないように近付いて倒せれば一番良いんですが……」

それが出来たら苦労しない、ってか（笑）

「えっと、アレを全部倒せば今日は解散ですか」

「ええ、今日は。でも、また後日戦うことになります」

・・・やっぱり？

というか・・・。

「まるで角砂糖ですね」

「砂糖星人ですからね。・・・隠れて」

玄野さんの言葉で、私と坂野さんは気付かれないように二人で隠れた。

「あの・・・行かなくても大丈夫なんですか？」

点数取れば、自由になれるのに。

「そんなの二の次でいいの。あたし、今回はアンタの護衛なんだからね」

「ご、護衛・・・。

どこのお嬢様だよ（笑）

「さ、坂野さん!？」

足がないっ。

「終わったみたいだね。あのマンションに戻るよ」

言った途端、彼女は消えてしまった。

私が消える感覚はない。

「あれ・・・？」

不思議に思っていると、後ろからポン、と肩を叩かれた。

「・・・え」

ウソ・・・なんで？

何でここに、星人が・・・。

「何で殺したの」

砂糖星人が口を開いた。

「はっ？」

「何で殺したの？」

「・・・貴方たちはこの星に、何しに来たの？侵略？」

「知らない。ここに住むって聞いただけ」

「・・・侵略のつもりはない、ってこと？」

「残ってるの、お前だけ。他のやつ消えたよ」

何で、私だけ？

「・・・復讐する。許さない。仲間を・・・お前たちは仲間を殺した！」

いきなり腕を降り下ろして来る。

「つつ！」

慌てて避けると、銃を持ち上げた。

あ、意外に軽い？

「撃つの？理由は？」

「貴方が狙ってきたから。正当防衛よ」

「さっき僕らは何もしなかった。なのに、何で殺されなきゃいけないの？」

不思議そうな星人に向けて、一発撃った。

それは星人に直撃して、数秒後星人は爆発した。星人の身体の一部が私の目の前に落ちてくる。

「あ・・・」

私・・・殺したの？

誰を？

砂糖星人を。

何で？

撃たなきゃ殺されると思ったから。

「あ……あ……」

足が震える。

震えてる足は、消えていた。

……転送、か。

気が付くと、私はあの部屋に居た。

六話

「詩織さん、大丈夫でしたか？」

目の前に、玄野さんがやって来た。

「わ、私……」

撃っちゃった。

それは言葉にならず、消えた。

「詩織さんが戻ってこないし、採点も始まらないから……何かあったの？」

「砂糖星人……もう一体居て。私に聞いたの。どうして仲間を殺したのか、って。何でか分かんないけど私……いつの間にか、星人に銃、撃ってた……」

「……星人が残ってたなら、なんで俺たちを転送した!？」

玄野さんが、ガンツを睨んだ瞬間、ガンツに文字が現れた。

《それぢわ、ちいてんをはぢめる》

「ちいてん……?」

「採点、って読むんだよ」

分かってるけど……。

《くろのくん 5点 どころなないでくだちい》

・・・は？

「怒鳴りたくもなるよ・・・なんで詩織さんだけ残したんだ！」

《たかはし 3点 けがしすぎ》

「怪我？」

「大丈夫だよ、怪我はこの部屋に戻った時に治る仕組みみたいだから」

・・・そうだった。

《おばさん 0点 ガードおつかれちま》

「・・・ありがとうございます、坂野さん」

「平気よ。たまには安全な場所にいるのも良いわね・・・でも、私がいなくなった後で星人が現れるなんて・・・」

責任を感じているのか、坂野さんは申し訳なさそうな顔をした。

「いえ・・・」

《すずき 3点 いつのまに》

「・・・え？」

鈴木さんがポカンとした。

《いないとおもた》

・・・ガンツ、ちよっとひどいよ。

《しおり 3点 はじめてで よくうちまちた》

「・・・はあ？」

え、何コイツ。

「なんか腹立つ。殴っていい？つてか痛み感じる？どこ殴ろう」

「許可する前から殴ること前提にしないで下さいよっ」

鈴木さんが慌てる。

「・・・なんで詩織さんだけ残した。初心者だぞ。・・・死んでた

かもしれないのに」

《おちえない》

「・・・こら玉。吐け」

私が言うと、一瞬高橋さんが顔をひきつらせていた。・・・なんで？

《しおり 知ってる から だいじょぶとおもた》

・・・知ってるから、大丈夫だと思った？

「・・・知ってるって。どっいうこと？」

不思議そうな顔をする玄野さんに、私は曖昧に笑うことしかできない。

(・・・ガンツは、私が異世界から来たということを知ってるの？)

《知ってる》

(・・・え、もしかして心の中読んでる？)

《よんでる》

・・・マジでか。

「・・・詩織さん。何か、この部屋のこと知ってるの？」

「ごめんなさい・・・今の段階では、何も言えないんです。近いうち話すことになると思うけど・・・」

「・・・じゃ、その時にちゃんと話してね？」

「はい。・・・く、玄野さん、足が・・・」

消えてる。

「ああ・・・今日はもう解散みたいだね。いつになるか分かんないけど、またここで会うことになるだろうから、よろしくね」

そう言つて、玄野さんは消えた。
いつの間にかみんな消えてて、残っているのは私だけ。

「・・・どうして、私だけ残したの？私を知つてたから何？知つてると経験があるのとは違つでしょ」

《いつかわかる》

なんか意味深。

「本当にふざけないで。教えてよ」

《ばいばい》

一瞬で、私は部屋を出ていた。

「百合子さんの、アパート・・・」

私は、玄関から部屋に入った。

七話

次の日、目を開けると百合子さんの家の中だった。
当たり前だけど、これが現実なんだと思い知らされる。

「・・・どうしたの？詩織ちゃん」

呆然としてみると、起きたらしい百合子さんが声を掛けてきた。

（・・・言えないよ）

昨日、一度死んでるなんて。

「何でもない。朝食、用意しますね」

私は、考えを振り切るように立ち上がった。

トントントン・・・。
リズムカルな包丁の音が、私を落ち着かせてくれる。
そのお陰で、私は昨日のことを冷静に考えることが出来た。

あの時、私は《死にたくない》という思いでいっぱいだった。
一度死んでるのに・・・また、ガッツの力で仮初めの生を受けてる
って、解ってるのに。

《死》への恐怖は、拭えなかった。

刻んだ長ネギを鍋に入れてかき混ぜる。

今日は長ネギと豆腐の味噌汁だ。

「百合子さん、もうすぐ完成しますからご飯よそって下さい」

「りょうかい」

ふああ、と欠伸をしながら、百合子さんは茶碗を出してご飯をよそ
る。

その間に私はサラダをお皿に盛って、ドレッシングはごまと青じそ
を出した。

私はごまで、百合子さんが青じそだ。

「・・・何かあった？詩織ちゃん。いつもと様子が違うけど」

「・・・少し眠いだけですよ。百合子さんが出掛けたら、洗濯物干

してすぐ寝るから大丈夫です」

誤魔化すように笑うと、百合子さんは納得と不安が入り交じったよ
うな顔をしてから白米を口に入れた。

「・・・映画沿いつてことは、やっぱり偽加藤とバトったり多恵が
狙われたりするのかなあ」

一人言を言いながら、買い物かごにキャベツを入れる。
お肉も買って、ロールキャベツにしようと店の入り口でキャベツの
値段を見て即決していた。
だって、安いんだもん。

「あれ・・・詩織さん？」

振り返ると、そこには不思議そうな顔をする鈴木さんが立っていた。

「この辺りに住んでらしたんですね」

「あ、はい」

居候ですけど。

そんなことを心の中で付け足して、笑った。

今、私と鈴木さんはスーパーの目の前にある公園に居た。周りの人から見たら、父親と娘かな。

「鈴木さんも、あのスーパーには良く？」

「ええ、近いので。・・・あのマンションに、住んでるんです」

「あのマンションって・・・近っ」

目と鼻の先どころじゃない。

「でしょ？」

にっこり笑う鈴木さんに、私は微笑み返した。

「でも、まさか鈴木さんとご近所さんだったなんて」

「私もビックリですよ。・・・あの後、大丈夫でしたか？」

あの後とは、つまり昨日帰ってからのことだろう。

初めて星人を殺して混乱した私を気遣ってくれているんだから、鈴木さんは本当に優しい人だ。

「いえ・・・正直、まだ混乱してるんです、私。何かしてないと怖くて」

「無理もありませんよ。僕も、初めての時は怖くて怯えてるだけでしたから」

確かに、そうだった。

鈴木さんは、そういう人だ。

「・・・貴女は凄いですよ。初めてで、怖くて、星人を撃つなんて・・・ガッツのこと、知ってたからでしょうか」

ピクリ、と肩が跳ねた。

「無理に聞き出すつもりはありませんよ。玄野くんも、言ってたでしょ?」

「ありがとうございます、鈴木さん」

しばらく雑談をして、困った時のために連絡先を交換して別れた。
・・・鈴木さんは、最後まで私がガンツについて知っていた理由は
聞かなかった。

八話

あれから一ヶ月が経ち、私はいつの間にかミツシヨンにも慣れてきていた。

「それにしても、詩織さん凄いな。何かスポーツでもやってた？」

部屋に戻ってきた途端、玄野さんが聞いてきた。

「……スポーツ？」

「……学校の体育でなら」

「それだけ？……反射神経が良いからてつきりどっかに通ってるのかと思った」

玄野さんが苦笑する。

「んー……スーツのお陰かもしれないね」

だって、このスーツ着てると本当に反応が早くなるんだもん。

「確かに」

玄野さんが納得していると、ガンツが採点を始めた。

《それぢわ、ちいてんをはぢめる》

……文字の間違い、何とかならないかなあ（読みづらいから）

《くろの 9点 つおい》

《すずき 0点 そんなときもある》

「……励ましてるつもりでしょうか、これ」

不思議そうな鈴木さんに、私は苦笑した。

《しおり 3点 にげるときにうるさすぎ》

「……怖いんだもん。仕方ないじゃん」

星人を倒せないと判断したとき、私は決まって逃げようとする。で、その時怖くて叫んでる。

「でも、詩織さんが叫んでくれると星人の場所が簡単に分かるんだよね……だから玄野くんも倒せたんでしょ」

桜井さんの言葉に、玄野くんが頷いた。

「だから、むしろ囷作戦にしちやいたいくらい」

「ええっ!？」

驚いて、大きな声が出てしまった。だって……囷だよ？怖いじゃん。

「ごめん、嘘。危ないもんね」

当たり前だ、冗談じゃすまないぞ。

《さくらい 3点 うそつきさいてー》

・・・私の弁護か、今度は。

「・・・すみません」

何か謝ってるし。

《たかはし 3点 よそろがい》

「俺が点数取つたらいけないのかよ」

あ、いじけた。

《さかの 0点 どまゐ》

「どまゐ？」

「ああ・・・ドンマイか？」

玄野さんが、呆気にとられて呟いた。

ドンマイ・・・励ますくらいならミッションなんかやらせないで欲しいんだけど。

「あ。鈴木さん。手が・・・」

「ああ、今日はお開きですか。・・・では、またいずれ」

そう言い残して、鈴木さんが消える。

ほかのメンバーも消えて、玄野さんと私だけになった。

「……詩織さん。まだ、話す気にはならないかな」

「……どう説明すれば良いか、分からなくて」

「そっか。……あ」

玄野さんの視線を追うと、私の手が消えていた。

「じゃあ、またね」

「はい、また」

見ると、玄野さんも消えかかっている。

私たちは、ほぼ同時に部屋から転送された。

九話

「はぁ、安かったぁ」

スーパーのセールがあったので行くと・・・鈴木さんに会いました
(何回目だろう)

「そうですね。結構得しましたから、食事代が少しだけ浮きました」

あははと笑う鈴木さんに私も笑いかける。

「・・・ミツシヨンって、いつまで続くんでしょうね」

「・・・分かりません。いつから始まったものなのかも私たちには
分かりません。・・・分かる人が居たかもしれませんが、彼はすで
に死んでます」

それって、もしかして・・・。

「西丈一郎・・・？」

「そんなことまで知ってるんですか」

鈴木さんが苦笑した。

・・・言うべきじゃなかったかもしれないけど、黙ってることはで
きないみたい。

「次のミツシヨンの時、鈴木さんと玄野さんにお話しします。・・・
私が、知ってることについて。何を、どのくらい知ってるのか」

「・・・分かりました。こう言つとおかしいですけど、早く呼び出されてしまいましたね」

鈴木さんの言葉に、今度は私が苦笑する。

だって・・・あんなのを早くやりたいなんて、ほとんどの人が思わないことだと思つけどなあ。

「何を知ってるか詳しいことは分かりませんが・・・何事も、一人で抱え込むと苦しい思いをするだけですからね・・・」

「でしょうね・・・このまま何も言わなければ、私もどうなるか分からなくて・・・でも、言つて良いのかどうか分からないんです。もしかしたら、ガンツに止められてしまつかもしれない。ガンツは、私が何を知ってるかが分かるみたいですから」

「・・・それでも、話してくれるんですよ」

「当然です。・・・ガンツに止められるのはいやですから、私と鈴木さん、どちらかが玄野さんの住所を聞いておくのはどうです？待ち合わせ場所も決めて、そこに指定時間に集まるんです。そこで話せば、いくらガンツでも邪魔はできないでしょう？」

ふと思いついた私に、鈴木さんは「なるほど」と呟いた。

「で、待ち合わせ場所は どうします？ 詩織さんも、予定があるでしょ？」

「特に何も。・・・このスーパーのセールとかがある時間は避けて欲しいですけど。後は朝食が六時半、夕食は大体八時くらいなので、

午前七時から午後六時半までなら、いつでも構いません」

「平日でも？」

「玄野さんって学生ですよね？授業あるんじゃないですか？やっぱり。だから、やっぱり土日か祝日になると思いますよ」

待ち合わせになる日程の希望を出来る限り絞って、私たちは別れた。

十話

「次のミッションの時、鈴木さんと玄野さんにお話しします。．．．私が、知ってることについて。何を、どのくらい知ってるのか」

と、言ったけど．．．。

「まさか今夜だったとはね．．．」

「え、何が？」

玄野さんが、私の言葉にキョトンとした。
．．．何か可愛い。

「や、えつと．．．」

言い出せない。

「玄野くんって、どの辺に住んでるんですか？」

「へ？」

鈴木さんの言葉に、玄野さんはマヌケな声を出す。

「や、詩織さんが話をしたいからと・・・」

その言葉に、玄野さんはハツとして私を見た。
私は、彼に小さく頷く。

「・・・話してくれるんだ」

「はい・・・ただ、お二人にだけ」

「そっか・・・分かったよ」

そう言つて、玄野さんは住所を教えてくださいました。

「結構近いんですね。じゃあ、って公園分かります?」

「ああ、はい」

「じゃあ、そこに・・・土曜日って空いています?」

「ええ、空いていますよ」

「じゃあ、15時に来ていただいてもよろしいですか?・・・詩織
さんの予定は大丈夫ですか?」

「あ、はい」

私は小さく頷く。

「玄野くんの方は大丈夫ですか？」

「ええ。・・・じゃあ、15時に」

約束を交わした途端、鈴木さんの足が消え始めた。見ると、玄野さんの首がなくなってる・・・怖っ。

そう思っていると、私は自分の部屋に戻っていた。

十一話

土曜日。

私は、待ち合わせの時間に合わせて百合子さんに「散歩してくる」と伝えて家を出た。

待ち合わせ場所は、ここからちょっと遠いと私は思うけど、鈴木さん曰く「ちょうど中間地点」らしい。

私よりも鈴木さんのほうが土地勘あるし、ここは信用しておく。

「えっと・・・信号を右・・・信号って、あれか」

いつものスーパーからのルートをメモした紙（鈴木さんに書いてもらった）を頼りに、歩く。

「次を左・・・で、コンビニとマンションの間の道に入って・・・えーっと・・・洋服屋さんの脇を通る・・・あとはまっすぐか」

真っ直ぐなら地図は必要ない。

そう判断して、私はメモをポケットにしまって早歩きした。

ちよつと迷っちゃったから、待ち合わせ時間ぎりぎりになるかもしれない。

（自分から話すって言うっておきながら遅れるなんて、失礼だもんね）

「あ、詩織さん」

「お待たせしました・・・ああ、やっぱり遅れた？」

「いえ、まだ時間になってませんよ・・・すみません、本当は一緒に行けたら良かったんですが」

メモをもらった時は、私もそう思った。
だが・・・。

「就職活動なら仕方ないですよ。ってか、そっちのほうが大仕事だし」

「すみません・・・」

リストラされたって言ってたけど、彼の背景などは映画では分かってなかった。

どうやら、ガッツのミッションをこなしながら就職活動をしていたらしい・・・お疲れ様です、鈴木さん。

「気にしないでください。・・・まあ、立ってるのも疲れるんで、座りませんか？あっちにベンチあるし」

私が指差すほうには、ちょうど三人が座れるベンチ。日陰だし、あまり人も来ない気がする。

「さて・・・何から話しましょうか」

実は、全く考えられなかった。

何から話せば分かりやすいかなんて、私にはわからないし。

「じゃあまず……どうして俺たちのことを？」

玄野さんが聞いてきた。

いきなりそれか。

「……非現実的なんですけど……」

「ガンツも充分非現実的だと思うけど」

……おっしゃる通りです。

「私、異世界から来たんです」

ズバツと言ってみた。

「……異世界、というと……？」

「こことは異なる世界、ってことです。私は、この世界に居てはいけない人間だと思うんですけど……いつの間にか、こっちの世界に来てて。最初はここがどこなのか、どうして私がいるのか全く分からなかったんです」

「今はわかるんですか？」

鈴木さんの言葉に、私は苦笑する。

「前者なら……でも、私がここに居る理由はさっぱり分かりま

せん」

「そうですか・・・で、ここは君にとって何なの？何か知ったのは、前の世界でのことでしょうか？」

玄野さんの言葉に、私は頷いた。

「私にとって、ガンツは・・・映画なんです」

「映画？」

玄野さんの言葉に、私は頷く。

「私は、気が付いたらこの世界に来ていました。今暮らしてる家は、この世界に来た時に私を拾ってくれた人の家です。ガンツに呼び出されるまで、ここが何処か分からなかった。・・・ガンツに呼び出されて、玄野さんの顔を見て驚いたわ。目の前にアイドルが居たんだもの。玄野の役は、人気アイドルだったから」

嵐の二宮和也。

本物に会えたなんて、最初は思ってたっけ。

「だけど、貴方は自分の名前は玄野計だと言った。・・・私は悟りましたよ。ここは、本来私が居るべき場所ではないと。そして、加藤勝と岸本恵、西丈一郎がすでに死んでいることもすぐに分かりました」

「・・・加藤たちのことまで、知ってたのか」

「はい」

玄野さんの言葉に、私ははつきりと頷いた。

「玄野さんと加藤さんが酔っ払いを助けて、電車にはねられてから、加藤さんと岸本恵さんが干手に殺される日までを知ってます。それと、その五ヶ月後以降」

「五ヶ月？……ってことは、あとのくらいだ……？」

玄野さんと鈴木さんが上を向いて考え始めた。

「二ヶ月じゃないですか？」

「そっか……じゃあ、もう三ヶ月ってことですね」

「あと、二ヶ月で……」

パーフェクトアンサーが、始まる。

偽物の加藤とガンツメンバーに、多恵が狙われる日は、刻一刻と近づいてる。

その事実が、私に重く押し掛かった。

十二話

「二ヶ月後、一体何が起きるんですか？」

鈴木さんの言葉に、私は下を向いた。

言っても良いのかな……。

過去なら、もう過ぎてるから構わないかもしれない。

だけど、未来は？私がいる時点で変わってるのに、これ以上変えるような真似して大丈夫かな……。

「……詩織さん？」

「ごめんなさい……言えません」

「……そっか」

玄野さんが、小さく呟いて私から視線を外した。
瞬間、彼の目が見開かれる。

「……?どうしました？」

「やべ、多恵ちゃんだ」

「はっ？」

彼の視線を追うと、確かに小島多恵さんが居た。

私たちには気づかず、別のベンチに座ってスケッチブックを取り出した。

絵でも書くのかな？

それにしても……。

「わー、多恵さんかわいいー……ん？」

視線を感じ見ると、玄野さんがこっちをガン見していた。

「何ですか？」

「多恵ちゃんのこと、知ってるんだね。……もしかして、ミッシヨンに参加するとか言うんじゃない？」

自分で言っておきながら青くなる玄野さんに、加藤さんも「ええっ！？」と慌てる。

「参加じゃないです！スーツ姿見たい気もするけど残念ながら着ません！」

「ああ……そう。別に見なくなっただっていいじゃない？スーツなんて

えー……だってヒロインじゃん。

「じゃあ、なんで？」

「そりゃ、主人公の玄野さんのガールフレンドですし……参加するわけじゃないけど、巻き込まれるのは事実なんで」

「えっ……？」

あ、言い過ぎたかも。

「ちょっと、詩織さん。それ、どういうことが説明してくれるよね？なんで多恵ちゃんかミッシヨンに巻き込まれるのさ」

「く、玄野くん落ち着いて下さいっ」

私の胸倉をつかんで離さない玄野さんを、鈴木さんが落ち着かせる。

「……ごめん、詩織さん」

「いいえ……不用意に口にした私にも、責任はありますから」

そりゃそうだよね……自分の恋人（本人はそんなつもりないかもしれないけど）がガンツのミッシヨンにかかわるなんて分かったら、そりゃ慌てちゃうよ。

やっぱり、言うんじゃないかった。

「……詩織さん、説明してくれないかな……」

「玄野さん……」

玄野さんは、一瞬多恵さんを見て言った。

どうしよう……開き直って言ってしまおうか。

「これ以上巻き込みたくないんだよ……今も加藤の弟の世話してもらってるのに」

「……歩くん、ですか？」

「ああ」

「そつか、生活費・・・つてか、玄野さんバイトしてるんじゃないんですか？今日は大丈夫でしたか？」

「え？・・・うん。今日は午前中だったから」

「そうですか・・・」

いくら大事な話だからって、仕事休ませたら悪いもんね。

「つて、話逸らさないでよ」

あ、気付かれた。

「・・・どうしても・・・言わなきゃダメですか？」

「教えてくれるまで帰さないよ」

それは困る。

「・・・分かりました・・・」

小さく呟いて、私はため息をついた。

「・・・さつきも言ったように、私は玄野さんたちがガンツのミッションを始めるところから加藤さんたちが死ぬまでと、その五ヶ月後のことを知っています。加藤さんが死ぬまでが第一シリーズで、五ヶ月後が第二シリーズなんですけど・・・第二シリーズ、つまりこれから二ヶ月後・・・偽物の加藤さんが、小さな黒い球を探して玄野さんを訪ねてくるはずですよ」

「えっ・・・偽物？というか、黒い球って？」

「黒い球には、ガンツと同じようにミッションが示されるんです。ただ、ターゲットは星人ではなく、人間ですけど。ターゲットは全て、ガンツの卒業生です。ガンツのミッションで100点を取り、記憶を失い解放されることを選んだ人たち。鮎川映莉子、ってご存知ですよね？」

インターネットで調べたら、すでに公式サイトが完成していた。とつくにデビューしているらしい。

「ああ・・・確か、モデルだったけ？」

「ええ。・・・その人が、殺すんです。黒い球に、操られて。そして、自分も殺される。・・・偽物の加藤に」

「・・・偽物って、一体何者なんですか？」

「星人ですよ。・・・千手観音の。加藤さんと岸本さんが死んだときの」

「え・・・そいつは俺が・・・」

「殺したはず・・・でも、生きていた。・・・いいえ、違う。もう一体居たのかもしれない。そこは曖昧だったんで、ハッキリ言いきれませんけど」

「もう一体・・・どっちにしろ、まだ星人が居たってことですよね？だったら、どうしてガンツは我々を部屋に戻したんでしょう・・・ガンツからすれば、もう一体殺してから我々を呼び戻したほうが良

かったのでは？」

鈴木さんの言葉に、私は首をかしげるしかない。そこもまた、曖昧なのだから。

「……続けて、詩織さん」

私は、小さく頷いて口を開いた。

「鮎川さんが殺される直前、最後のターゲットになっていたのが彼女……多恵さんです」

未だに絵を書いている多恵さんを見て、私は言った。

「多恵ちゃんが……ターゲット？まさか、多恵ちゃんって卒業生？」

「いいえ……違うと思います。私が思うに、ガンツは玄野さんに戦い続けてほしかったんだと思います。多恵さんが死んだ後もミッションを続けて、100点を取れば彼女は生き返ることができるんだと思います。でも、貴方はその道を選ばなかったけど」

「他にも方法があるってこと？」

「残酷な方法ですけど……貴方にはほかの選択肢を選ぶことはできなかつた」

ガンツの中に入りほかの人間からガンツや自分の記憶を消してしま
うのは、残酷だ。

そりゃ、みんな忘れてるんだからそうは思わないけど……悲しす

十三話

「・・・何をしたの？俺は」

「ガンツの中に、人が居ましたよね？」

「ああ、居たな。生きてるみたいだけど・・・会話はしたことないよ」

「きつと、彼も貴方と同じ選択をした、ミッションの経験者でしょう。ガンツの寿命は半永久的・・・でも、その為にはガンツの中の人間が入れ替わる必要があるんです。今ガンツの中に居る人は、自分があつた球に閉じこもることで、ほかの人たちの寿命を延ばしている」

「意味がよくわからないんですが・・・」

鈴木さんが首をかしげる。

「私たちは今、死んでます。その魂はあの世には行かず、ガンツによつてあの部屋に、新しい肉体をもつて強引に甦らされた存在・・・ガンツの中の人が死んで、ほかに中に入る人が居なかつたら・・・当然、ガンツのミッションで生き残つた人間は全て消え去ります。跡形もなく。死体はないから、何も残らない。死んだかどうかも分からないから、お墓も作ってもらえるかわかりませんし」

「・・・じゃあ、玄野くんはまさか中に・・・」

「はい、玄野さんはガンツの中に入り、ほかのメンバーの記憶を消

して自分の寿命の分だけでも生かそうと考えたんだと思います」

「思います?」

「・・・別に、玄野さんの心境が全部分かるわけじゃないですからあのシーンは、私も起きたことしかわからない。

玄野計という人間が、何を思って行動を起こしたのか・・・映画では、表現されなかったから。」

「まあ良いや・・・それで?」

「え? 終わりですよ。玄野さんがガンツの中に入って、エンディングです。最終的に多恵さんが泣いてたので、記憶が戻ったのかと疑問に思わせるところがありますけど」

「・・・多恵ちゃんの記憶も、消すんだ・・・」

「はい、消しますね。・・・多分、その流れなら私の記憶も消すのかもしれないけど・・・勘弁してくださいね? だって、記憶を失ったら、私がどこにいるべきなのかが本当に分からなくなってしまうから」

「え?」

「言ったはずです。私は異世界から、こことは異なる世界から来た。この世界に居場所はあの家しかない。でも、あの家での記憶も消えるかもしれないから」

「・・・」

玄野さんが黙った。

「あなたにとつては、アレが最善の策だったのかもしれない・・・でも、他に方法があるかもしれないのに、あの方法は悲しすぎます。・・・って、今の玄野さんに言っても仕方ないですよね」

私と違って、未来を知ってるわけじゃないし。

「そう・・・でも、何で俺ら二人だけに教えたの？」

「・・・多恵さんがターゲットになったとき、多恵さんを倒す派と守る派に分かれるんです。その中から、お二人を選びました」

「そうですか・・・あ、多恵さんこっちに気づいたみたいですよ？」

見ると、彼女は玄野くんを見つけて、荷物を持ってこっちにきた。

「玄野くん、こんなところでどうしたの？」

「や、えつと・・・」

「・・・初めまして。鈴木といいます。玄野くんとは、バイト先が一緒でした。偶然あったので、日陰で話してたんですよ。・・・あ、こっちは詩織さんといって、私の親戚です。今日は学校が休みらしいので、遊びに来ているんですよ」

その言葉に、私と玄野さんはポカンとした。

「そうなんですか・・・ごめん、玄野くん。邪魔しちゃったかな」

「あ、大丈夫だよ。話もひと段落したし。・・・で、そのスケッチ

ブック見せてよ。何か書いてたんでしょ？」

「え？ま、まだダメっ。完成してないんですっ」

慌てる彼女は、何故か知らないけど私の後ろに隠れた。

「え。何で私？」

「目に入ったからです、ごめんなさい」

いや、謝らなくても。

「・・・玄野さん。多恵さんに話すかどうかは、貴方が決めてください。話しても構いませんし、その逆も然りです」

「・・・考えとくよ」

「何の話ですか？・・・あ、歩くんが牛乳買ってきて欲しいって」

「じゃ、スーパー寄っていきうか。・・・じゃあね、詩織さん。鈴木さんも」

多恵さんと玄野さんが立ち去り、私と鈴木さんも帰ることになった。

十四話

あれから・・・玄野さんと鈴木さんに説明してから、どのくらい経ったんだろう。

あのモデルの元に、小さなガンツ玉は送られたのだろうか。少なくとも、偽の加藤が現れたとは聞いてないから、始まったとしてもまだそこまで進んではないだろうけど。

ハッキリ言って、今の私に映画の記憶はあまり残っていない。もう、ずいぶん前だったような気がする。

だから、私は昨日、ガンツの映画のストーリーを思い出せる限り大学ノートに書いた。

学校に行ってるわけでもないのにノートを欲しがった私を、百合子さんはどう思ったんだろう。

きっと、不思議に思ったはず。それなのに、何も言わず渡してくれた。

「今日はどうしようかな・・・」

するべきことはしたつもりだ。

それが済んだということは、今日はやることがない。

「・・・平和だなあ・・・」

部屋の窓から外を覗くと、空を飛んでる鳥（名前はわからないけど）が見えた。

たまにはこんな日も良いのかもしれない。

尤も、それが普通なのだけ。

時々思う。

私が元々いた世界で、一体私はどういう状態になっているのか。

入院している？それとも、もう死んで土の中？いや、それ以前に・・・私の存在は、あそこにあったことになっているのが不安になる。

「・・・散歩でも行こうかな」

どうせ家にいても暇なだけだと判断し、私は百合子さんに貰った合鍵と財布、携帯を持って家を出た。

行先なんて決めてないし、正直暇が潰せればどうでもいい。そう思った瞬間、誰かに話しかけられた。

「村上詩織さん」

「・・・え？」

「初めまして、少し時間ある？」

「暇で散歩しようとしたところですから、少しではなくかなりあります」

「それは良かった」

「誰ですか、貴方は。どうして私の名前を知ってるんです？」

私の名前を知ってるのは、百合子さんとガンツのメンバーだけのはずだ。

「重田正光。・・・黒い玉のある部屋について、調べてる」

「・・・黒い玉・・・」

ガッツのことだ。

そうか、彼はもう調べ始めてるんだ……。

「私に何を聞くつもりか知りませんが、何も知らないほうが身のためですよ?」

危険だから。

「危険と隣り合わせなのは仕事柄だ、問題ない」

大ありだと思っただけど。

「……上がっていきます?」って言っても、居候の身ですけど」

「じゃあ、ご家族は?」

「私の血縁は、私がここにいることを知りませんから。……どうぞ」

私は、鍵を開けて彼を中に入れる。

「今、お茶を出しますね」

「いいですよ、すぐに済ませますから」

「……そうですか」

私は、そのまま彼が座るテーブルを挟んで座った。

「……それで?」

「君は、黒い玉のある部屋に行き来しているね」

「……ええ」

「部屋で何が行われている」

「……闘いです。大切な誰かを、何かを……守るための」

「……闘い？」

「貴方が手を組んでいるであろう黒い服を着た集団……あれも、黒い部屋に行く者からすれば敵です。いずれ、彼らと戦うことになる」

「……何者か、分かってるんだね？」

「黒い玉は、ガンツと呼ばれています。……私が部屋に行けるようになる前から、そう呼ばれていたんです」

「ガンツ？」

「言っても、言わなくても同じなら……彼の怪我ができる限り抑えられるよう、伝えなきゃ。」

「ガンツという玉はとても大きくて、人が入れます。……座つてますけど。その人の寿命が、ガンツに呼び出された死者の寿命と一致します」

「……部屋には、死者しかいけないのか」

「はい。私も、事故死したはずなんです。なのに、気が付いたらあの部屋に居た。そして、私より先に部屋に来て戦っていた人たちに説明を受けて戦って、今に至るんです」

「・・・玉に入っていると聞いたね。その人間も、部屋で戦っていたのか」

「多分。・・・私たちは、闘いをミッションと呼んでいます。戦う相手は、星人。黒服を着た集団は、私たちが過去倒した星人の復讐をするために集まって、情報を集めているんです。貴方を利用して」

「・・・なるほどな」

「・・・死んだはずの人間が生きている現象は・・・」

「ガンツに呼ばれたと考えると、まず間違いありませんよ」

「そうか・・・」

重田さんは、重い溜息をついた。

多恵のことを守ってほしい、なんて図々しいことは言えない。だけど、言いたい気持ちも強い。

・・・どうしよう。

ノート、渡しちゃおうかな・・・。

「・・・何か言いたそうな顔してる。どうした？」

重田さんが言った言葉にギクリとする。

・・・これじゃ隠すに隠せないよ。

「これを……」

「ん？」

「私はさっき、身内は私がここにいることを知らないと言いました。ここ、というのを、貴方はこの家だと判断したはずです。私は……この世界、という意味で口にしました」

「世界？」

「突拍子もない話に聞こえるかもしれないけど、私は異世界から来たんです。その異世界で、私はこの世界のことを知っていたんです。……重田さん、小説とか漫画とか、読みます？」

「まあ、少しなら」

「そのストーリー、頭の中に少しくらい入ってますよね？」

「ああ」

「……その小説の中に入った、という感覚なんです。私の場合」

「……」

重田さんが考え込む。

「……私は、私が存在しない場合の未来を知ってる、ということ
です」

重田さんが顔を上げる。

「そのノートには、その未来が書いてあります。そのノートは大事なもののなので、コピーでなら渡せます」

「・・・大事なら、なぜ俺に？」

「虫がいいかもしれませんが、貴方に守ってもらいたい人が居るんです。ガンツに呼び出されてるわけじゃない重田さんが、100%守り切れるかは分かりません。だけど0%じゃないはずでしょう？ 私たちの中にも、彼女を守ろうとする人は居ます。だけど、少数派なんです」

「・・・その女性の名前は？」

「小島多恵、といいます。・・・詳しくは、そのノートを見ればわかると思います」

「また聞きたいことが出てくるかもしれないし、連絡先を教えるてもらえるかな」

「こっちはそのつもりで家にあげてここまで説明してるんだよね。」

「分かりました」

連絡先を交換して、ノートをコンビニでコピーして、私たちはその場で別れた。

十五話

重田さんと会って一ヶ月と少しが経った。

あれから、重田さんとはメールのやり取りをしている。

新しいメンバーは来ていないか、メンバーにこういう名前の人間は居ないか。

重田さんは、相変わらず黒服星人との関係を保っているらしい。

情報源は多いに越したことはない、と言っていた（メールでだけ）

そして今、私はガンツ部屋に居る。

新しいミツシヨンだ。

（どんな星人だろう）

スーツに着替え終わり部屋に戻ると、ガンツの近くに女性が座り込んでいた。

まだ来てない人居たっけ？・・・いや、今までのメンバーはもう来ていてスーツに着替え終わってる。
となると・・・。

（新しいメンバー・・・山本さん？）

「貴方も・・・選ばれたんですね」

玄野さんの言葉に、女子高生が振り返る。

彼女の眼は、玄野さん含める私たちの服装にか、今の状況にか・・・
目を見開いていた。

「最初は慣れないから、見てるだけで構いません。・・・詩織さん

も、そうでしたから」

そう言いながら、玄野さんが私を見る。

「……えっと、初めまして。村上詩織って言います。あの、事情は後で説明するので、このスーツに着替えてもらえますか？えっと……お名前は？」

「……山本です。山本真子」

やっぱり、ガンツの卒業生か……。

「えーっと……あつた。これが山本さんのスーツ。向こうで着替えてきてください。待ってますから」

「……えっと……」

男性がいることを気にしているのか、困ったように私を見る。

「……じゃ、私後ろ向いてるから。行こう？」

何が起きたのかまだ分かっていない彼女を連れて、廊下に出る。扉を閉めると、坂野さんが立つのが気配で分かった。

……優しい人だ、見張ってくれてる。

「あ、下着も脱がないと着れないよ。大丈夫だよ、私も外してるから」

また不安そうな顔をする彼女に笑顔を向けると、私は後ろを向いた。

「……詩織さん？」

玄野さんの声がした。

「え？まだ終わってませんけど」

山本さんがあわててるのが、音でもわかる。

「いや、男の人が新しく来たから……こっちで着替えさせちゃうから、終わるまで待っててもらっていい？だから、坂野さんもそっちに移動をお願いしようと思って」

「そういうことなら構いませんよ」

そう言って、私は扉を開ける。

そこから坂野さんが入ってきたのを確認して、私は再び扉を閉めた。

「あの、終わりましたけど……これで良いんでしょうか」

「ええ、それで良いのよ。……でも、新しく人が来るのは久しぶりね」

「そうですね」

「……あの、これって一体……私、電車に轢かれて死んだはずなんですけど……」

「私たちも似たようなものですよ」

「え？」

山本さんが戸惑う。

「ここには、死んだ人間の中から選ばれた人間が、呼ばれるんです。星人と呼ばれるものを、倒すために」

「星人……？」

「見ればわかると思うんだけど……玄野くん、まだ？」

坂野さんが扉に向かって言う。

「あ、はい。良いですよ」

言われてはいると、アフロの頭をしたおじさんがいた。

「初めまして、村上詩織です。貴方は？」

「あ……中村です」

軽く頭を下げてくる彼を見て、やっぱりと思った。私を含めて、新しく入ってきた4人。

彼らは卒業生の中でも実力者だからだとして、私は……やっぱり、未来を知ってるからなんだろうか。

というか、なんでガンツは私のこと知ってたんだろう。不思議に思っていると、ミッションが表示された。

……くま星人？

え。熊なんですか？可愛いといいな……。

「転送が始まる前に、これを渡しておきます」

玄野さんが、二人に銃を渡した。

「え？」

「これから、星人と呼ばれる敵と戦うためにどこかの町に移動します。戦いに無関係の人に、僕たちの姿は見えません。星人の姿も、僕たちにしか見えません」

「まるで幽霊ですね。……まるでじゃない。皆さんも、死んでるんですよね……詩織さんに聞きました」

「そう……確かに僕たちは死んだ。ガンツに与えられた体に魂を入れ替えられたようなものかな。その体で、今まで生きてきたんだ。……あ、転送が始まった」

見ると、桜井さんが消えかかっていた。

山本さんは、小さく悲鳴を上げて私の腕をつかむ。

「大丈夫。移動するだけですから」

そう言う鈴木さんは、首が消えていた。

あのタイミングじゃ余計怖がるだけじゃないかと思っただけじゃ、彼が完全に消えてからだった。

「ヒッ……」

山本さんの、私の腕を握る手が強くなり振り向くと、彼女の足が消えていた。

私の視界はすぐに外になったが、下を見ると体がまだらしい。

早くしろ、なんだか気分が悪い。
そんなことを思っていると、すぐに転送が完了した。
隣には、未だに私の腕をつかんで離さない山本さんがいる。

「……大丈夫？山本さん」

「大丈夫じゃないですよ……何ですかこれ……」

「転送って呼んでる……さつき玉に映ってた文字とか見た？くま星人って、出たから……たぶん、くまだと思うけど……詩織さんと鈴木さんは山本さんの、坂野さんと桜井さんと俺で中村さんのガードをお願いします……何かあつたら、大声出せば大体わかるから」

前半は全員に、後半は私に言った。

……そんなに大きいか？声。

「大きい」

「声に出してました？」

「うん」

なんか悲しい。

「……じゃあ、私たちはあっちに行きましょうか、鈴木さん」

「そうですね……あ、鈴木といいます。よろしくお願いします」

「あ……はい」

私の後ろに隠れるのはなぜだ、山本さん。

「・・・星人が居る気配はありませんね・・・」

「気配とか分かるんですか？」

私の言葉に、山本さんが驚いた声を上げる。

「んー・・・人の気配はあんまり。でも、続けてるうちに分かるよ
うになっちゃったみたいで」

「そうですね・・・あれ、坂野さ・・・？」

山本さんの視線を追うと、彼女はすでに消えていた。

「え、嘘。玄野さんたちもう倒したんだ」

すごいなあ。

「え？」

「今回は、玄野さんたちがいた方向に星人が居たってことだと思っ
じやなきゃ、転送は始まらないもん」

言ってるそばから、山本さんの手が消えている。

それを追うように鈴木さんが消え、私もいつの間にか部屋に戻っ
ていた。

「早いですね」

「ああ・・・前回キツかったから、拍子抜けな気もするけど」

「あはは・・・まあ、全員無事だったんだから良いじゃないですか」

「そうだね」

そんな中、ガンツの採点が始まった。

《くろの 94点 あと6点で終わり》

「いよいよ、ですね」

鈴木さんの言葉に、玄野さんが頷く。

「はい」

「一体何なんだ、さっきのくまの化け物！いきなり向かってきて・
・大体あんたら何なんだ！」

中村さんが叫ぶ。

「えっと・・・」

桜井さんが口ごもる隣で、鈴木さんが口を開いた。

「私はサラリーマンでした。小畑文具で20年間、皆勤で働きまし
た。・・・リストラされましたけど」

「あたしは坂野。介護士やってます」

「昼間はね。でも夜はホステス。歳ごまかしてな。・・・あ、俺高
橋ね。よろしく」

「あんたふざけてんの？」

「いや別に。コイツおばさんのくせに人気あるんだよ。信じられ
るか？」

「コイツはヒモ。女の敵なの。・・・山本さんも詩織さんも気をつ
けなよ」

まさか話を振られるとは思ってなくて、私は山本さんと顔を見合わ
せた。

「……あ、私は村上詩織って言います。事情があつて知人の家で居候してます。よろしく」

「玄野計。この中じゃ、一番最初にここに来てるんだ。鈴木さんも一緒だった」

「オレは桜井。フリーターっす。今はカレー屋でバイト中。チェーン店なんですけど、結構おいしいんですよ。よかつたら来てくださいよ」

「……だつたら店の名前くらい言えばいいのに。」

「わたくしは小林と申します。オリエンネットというところで、システムエンジニアをやっております。ひとつ、ご用命の際は」

と、言いながら深々と頭を下げる小林さん。

いつまでたつても営業口調の抜けないおじさん。

そういえば、彼とはあまり会話を交わしてない気がする。

「で、貴方たちは？」

「あ……山本真子って言います。高2です。詩織さんから、ここが死んだ人の集まる場所ということは聞きましたけど……」

「……死んだ人がガンツによって呼び出されて、本人の意思に係なく星人と戦うことを義務付けられる……そういう場所ですか」

玄野さんが、悲しそうに笑った。

「……で？」というように桜井を見ると、中村さんは口を開いた。
「美容師だ」

その言葉に満足したように桜井が視線を外すと、今度は山本さんが不安そうに玄野さんを見ていた。

「……？」

その視線の意味が分からないのか、首をかしげて彼女を見る。

「あの、何体？何人？居たか分からないけど、こんな早く終わるものなんですか？星人との戦いつて」

「今回は珍しいと思うよ。一気に来たから、逆に何とかなったというか」

「すごいな、おい。」

「……強いんですね。どうしてそんなに……強くいられるんですか？どんな姿か分からないけど、たぶん私、逃げちゃいますよ」

「……生き返らせた人が居るからね」

「え？」

「……ガンツ」

鈴木さんの呼びかけに答えるように、ガンツに死んだ人間の写真を

出した。

玄野さんはその中の一人・・・加藤勝を見ている。

「彼は、前ここで戦った人間です。玄野くんの友人・・・いえ、親友です。ガンツのミッションで100点を取って、彼を生き返らせたいんです」

「・・・100点を取れば、人を生き返らせることができるんですか？」

「はい」

不思議そうな山本さんに、鈴木さんが答えた。

「こいつだけじゃない。ここにいる全員を、僕は助けたいんです」
それがどれだけ難しくても、かれはやる。・・・絶対に。
そう思った。

十六話

ミッシヨンの後、目を開けると百合子さんの家の前だった。夜中だからと百合子さんを起こさないよう、私はこっそりと中に入り鍵を閉める。

携帯電話を取り出して、メール画面を出して本文を打ち出す。

山本さんと中村さんのことをできる限り細かく（と言っても名前と職業、性別、見た目くらい）書いて改行し、多恵さんに異常は無いか確認の文章を入れた。

あて先は、重田さん。

送信ボタンを押して充電器に差し込むと、私は少しでも寝ようと布団に入った。

朝になり携帯を確認すると、重田さんから返信が届いていた。

《直接会って話したいです。

今日の午後、空いてる時間があったら返信を下さい。

場所の指定も村上さんに任せます》

そう書いてあった。

「今日は別に予定ないもんなあ・・・」

《おはようございます。

午後は18:00まで空いてますよ。

うちの近くのスーパーご存じですか？

その向かいにある公園で、13:00頃はどうですか？》

そう打って、送信ボタンを押す。

送信されたことを確認すると、私は朝食の準備に取り掛かった。

《わかりました。

じゃあ、公園で13:00に》

朝食の後のメールを確認して、私は午前中何をしようか考え込んだ。

そして、待ち合わせ時間。

(・・・え、午前中？家事を終えた直後にベッドの中ですけど何か文句でも？)

重田さんは、すでに来ていた。

私に気付いて、手招きする。

彼は、人目に付かないベンチに座っていた。

まるで、玄野さんと鈴木さんに話したときみたいな気分になるのも、多分そのせいだろう。

「悪いな、急に」

「いえ、こっちこそ夜中にメールしてごめんなさい。・・・というか、あんな遅くまで何してたんですか？」

メールの発信時刻は、私が最初のメールを送った一時間後だった。

「ああ、書類の整理とか色々あってな。・・・まあ、そんなことはどうでもいいだろう。新しい人が来たなんて言うから驚いてな。君以来なんだろう？新入りは」

「ええ・・・卒業生です、例の」

ノートを既に読んでいた重田さんは、ああ、と納得した。

「じゃあ、始まったんだ？君の知ってる、映画とやらが」

「はい。・・・多恵さんは、何ともないですか？」

「ああ。別にあいつらが接触する様子はないよ。本当に襲われるのか、疑問に思うくらいだ」

「私もビックリしてるんです。どうして一般人であるはずの多恵さんが狙われたのか分からなくて。・・・でも、事実は変わらないから。映画での事実がこの世界での事実にならなければ良いんですけど・・・それは難しいでしょう」

「だろうな」

重田さんは、タバコを口に啞えた。

吸う人だったのか、この人は（そんなシーンあったっけ？）

「今は、俺の部下に頼んである。文句言うから、信用できる情報源からの情報だって言ったらしぶしぶ了承してくれたよ」

「よく信じますね。馬鹿にされてもおかしくない内容だと思うんですけど」

「まあな」

笑って、タバコの煙を吐き出す。

「けど、こんな手の込んだ嘘は吐ないだろ？」

「勿論です。警察の人を引っ張り回すなんて、悪趣味でしょ？」

「確かにな」

重田さんが頷く。

その直後、携帯電話が鳴り響いた。画面を見て、目を見開く。

玄野さんからだ。

「もしもし？」

「詩織さん？加藤が来たよ。・・・星人、なんだよな？」

「そうですね。・・・もう来たんですか」

うん。一応伝えるべきかと思って。

「助かります」

即答した。

今、映画のどの辺りなのかを知るためにも、情報は多いに超したことはない。

「・・・誰からだっただ？」

携帯電話をポケットに入れたのを確認して、私に問う。

「玄野さんからです。・・・星人が、来たそうです」

「そうか・・・もうか」

ノートに書いておいたことは、全部頭の中に入ってるらしい。
・・・羨ましいな、その記憶力ちようだいよ。

「私は、取り敢えずこれから玄野さんと会う約束をしましたけど・・・
話はもう良いですか？」

「ああ。現状の確認をしたかっただけだからな。・・・俺は多恵さんの所に戻るよ」

そう言つて、重田さんは公園から出て行つた。

・・・公園の前に止めてあつた邪魔な車は、どうやら重田さんのものだつたらしい。

邪魔にならないところに駐車してよ、警察官。

十七話

「玄野さん」

前に行った公園に行くと、玄野さんはベンチに座っていた。前とは違うけど、日陰で涼しそう。

「ごめんね、急に会いたいだなんて」

「私は構いませんけど・・・多恵さん、浮気とか思いませんかね？」

「いや、思わないでしょ・・・でも、最近誰かに見られてるような気がするとか言ってたような・・・まさか、もう星人が？」

ああ・・・もしかして重田さんかな。

「玄野さん。その人なら大丈夫ですよ。・・・その人、私がお願いしてるだけだから」

「はっ？」

「ガンツについて、調べてる人がいるの。その人にできる限り情報を与えておいて、多恵さんを守ってもらつつもり。転送された後で守っても、遅いかもしれないから」

「・・・少しくらい相談してよ」

困ったような玄野さんを見て、申し訳なくなった。言えばよかったかな・・・。

「すみません。・・・そういえば、玄野さん。ガンツのこと、話さなくていいんですか？こっちで守るのは当然必要なことですけど、多恵さん自身が警戒してくれていれば、こっちの負担も減ると思うんですけど」

「信じると思う？実は俺、一度死んでるんだよ、なんて言っただよ。変なこと言っただよと思われただよ。・・・頭がおかしくなったかと思われるかもしれない」

「まあ、完全に否定することはできませんけど・・・」

「それに、あまり知られたくないんだ。人間じゃないとはいえ、俺は命を奪ってるから・・・」

「そうですね・・・」

確かに、恋人には言えないかもしれないなあ・・・。

「・・・あの加藤は、本当に偽物なんだよね？」

「偽物ですよ。あの星人は、死んだ人間の姿を象ることが出来るんです。・・・加藤さんが死んだとき、あの星人は近くにいて、彼の容姿を手に入れたんですよ」

「・・・黒い玉について、聞いてきた。それから・・・ガンツを終わらせるって言ってたけど」

「ガンツを終わらせる方法は、私は知りません。あるかどうかも分かりませんよ」

原作もアニメも見てないから、もしかしたらすべてを救う方法があるのかもしれない。

でも、それを私が知らない以上、どうすることも出来ない……。

「そっか……」

「でも、その星人がガンツを終わらせる方法に心当たりがあるというの事実です。じゃなきゃ、星人を倒そうとする玄野さんに接触なんてしないと思いませんか？リスクが高すぎますよ」

「黒い玉が、奴らの狙いつてことか」

「そういうことです。……黒い玉は、あの部屋に導く鍵となるもの。鍵さえ見つけてしまえば、扉を開けるのは簡単ですからね」

「ガンツを破壊する気、つてこと？」

「そうすれば、ガンツは終焉を迎えますから。……でも、私たちがだって死ぬ。それを阻止するために「俺がガンツの中に入る、つてこと？」……そうです」

玄野さんが考え込む。

ほかに方法があるはずなのに、それが浮かばない。

ガンツはずいぶん前に始っていたはずだ。

いつの間にか現われて、ミッションをして……。

始まりがあるなら、終わりもあるはず。

その終わらせる方法は、本当にガンツの破壊のみなのだろうか。

他に方法があれば、実行するのに……。

十八話（前書き）

かなり時間が開きましたが、まだまだ続くので、良かったらまた読んでください。

十八話

「あ、やべ。詩織ちゃんだ」

転送されたとたん、誰かの声が響く。

「やばいつて何が？」

振り返ると、桜井さんが着替えてた。

「え、向こうで着替えてくださいよ！何でそこで着替えてるんですか！」

「だって、あっちに坂野さんが居るんだもん」

ええー……。

「だからって……もーっ」

自分のスーツを手にとって、私は坂野さんが居るであろう廊下に行った。

「ちよつ、入って……なんだ、詩織さんか」

「いきなり呼び出されるのは慣れたけど、部屋にいたら桜井さん着替えてるんですもん。ビックリしちゃいましたよ」

「まあね。ほら、向こう向いてるからさっさと着替えちゃいなよ」

頷こうとすると、誰かの悲鳴が聞こえた。
この声って・・・山本さん？

「う、ごめんって!」

まだ着替え終わってなかったのか。

すぐにドアをノックする音がして、私が返事をする勢いよく扉が開いた。

部屋から山本さんが出てきて、即座に扉を閉める。

彼女は肩から息をしていて、顔はちよつと赤くなっていた。

「・・・大丈夫?」

「大丈夫じゃないですよ!何で全員そろってるわけでもないのにあんなところで着替えるんですか!常識はずれですっ」

「うん、私もそう思う。・・・さっさと着替えよ?後で説教してやらなきゃ」

「勘弁してよーっ」

私の声が聞こえたのか、桜井さんが叫ぶ。

「そんな余地はないわ」

そう言い返して、山本さんと着替える。

部屋でなんか言ってるけど、そんなの無視だ無視。

「あ、他の人来たからちよつとそのまま待ってて」

「桜井さんと違って常識あるのでそのくらい分かってますー」

そう言い返すと、服を畳んでスーツが入ってたケースに仕舞った。

「今日の星人・・・強いのかな」

山本さんが呟く。

偽物の加藤が現れた以上、電車でのミッションも遠くはないだろう。もう、すでに卒業生は揃っている。

「大丈夫よ、何とかなるわ。・・・玄野さんが居るんだし」

「それ、他力本願でしょ」

私の言葉に、坂野さんがダメ出した。

う・・・だって鍵は玄野さんが握ってるんだもん。

「もう良いですよ」

鈴木さんの言葉に返事をして、私たちは部屋に入る。

瞬間、ガンツからラジオ体操の歌が流れてきた。

いつ聞いても、不気味だ。

《てめえ達の命はなくなりました。帰りたいかったら、この方をヤツつけに行ってください》

相変わらず反転文字や誤字脱字のある文章が消え、ターゲットが現れた。

《黒服星人 特徴 一見ふつう 好きなもの 黒いボール》

黒いボール、というところを見てか、玄野さんが私を見た。私は小さく頷いて、武器を手にする。

「黒いボールって、何でしょうね」

鈴木さんの言葉に、誰も答えない。

「行こう」

玄野さんの言葉に答えるように、ガンツから青白い光が現れた。その光は私たちに当たって、その部分から転送されていく。全ての転送が終了すると、私たちは真っ暗なところにいた。電車だ。・・・始まる。

「なんだよ、ここ」

「・・・電車じゃないの？」

電気が一気に点いた途端に聞こえた、高橋さんと坂野さんの会話。

「何か変だな」

玄野さんが言った。

彼の視線は辺りを見回し、最後に私に移る。

「なあ、あなた」

ふと、中村さんが、山本さんに声を掛けた。

「ずーっと前に、会ったことねえか？」

「・・・貴方と、私ですか？無いと思いますよ？男性の知り合いは極端に少ないから」

ハッキリ言う山本さんを、中村さんは怪訝そうに見つめるだけ。

・・・中村さんは、思い出しかけてるんだ。

《ガタン！》

音がして、いきなり電車が動き出した。
不意を付かれて、バランスを崩す。

「うおっ!？」

倒れる直前、誰かにキャッチされた。
前を見ると、桜井さんが立っている。

「大丈夫？詩織さん」

「ありがとうございます。助かりました」

危ない危ない。

周りが警戒し武器を構える中、私は苦笑していた。

「これ・・・地下鉄ですよ」

鈴木さんの言葉に、小林さんが窓の外を見る。

私も追いかけるように見ると、トンネルの中を走っているのが分かった。

「みんな、油断しないで」

玄野さんの言葉に答えるかのように、電車はトンネルを抜け、ホームに止まった。

《到着の電車は、当駅発、新田町行き電車です。間もなく発車します》

アナウンスの直後、ドアが開いて乗客が乗り込んできた。

十九話（前書き）

遅くなりました

十九話

乗ってきた乗客は、私たちをチラチラと見ていた。
私は、武器を下ろして口を開く。

「すみません、事情がありこんな格好をしていますが、怪しい者ではありません。あなた方に危害を加えるつもりもありません」

「え、何これ。イベントか何か？」

近くに居た女性が、連れに囁く。

周りがざわざわしていく中、車両の後方のドアが開いた。

ドアの向こうから現れたのは、黒服に身を包んだ連中。
黒服星人だ。

「何かご用があるなら、口で仰ってください」

「・・・これは復讐だ。先に仕掛けて来たのはお前たちだ」

「侵略しようとしたのはそちらよ」

私が会話をしている間に、電車のドアが開いた。

「えっ」

玄野さんが驚きの声をあげる。

《この列車は、緊急停止致します。皆さまは、速やかにお降りください》

疑問に思いながらも、車内から乗客が消えていく。

「何がどうなって・・・」

「知り合いにお願いしたんです。これで思い切り戦えますから」

「詩織さんの知り合いって、何者？小島さんのことをお願いしてたのも、その人なの？」

「ええ、歩くんのもお願いしました。その人は警察の人間です。死んだ人間が生き返る事件について調べていたので、真相を明かすと共に協力を要請しました」

「警察、動いてるんですか？」

不思議そうな鈴木さんの言葉に、私は頷く。

「詩織さん、君一体何を知って・・・そう言えば、来たばかりの頃・・・ガンツは君が前もってあの部屋のことを知ってるって言ったよね？その知ってることで、ここまで動けたってこと？」

桜井さんが聞いてきた。

「その通りです。このミッションが終わったら説明します」

今は、それどころじゃない。

黒服星人たちは、私たちに隙が出来るのを待っている。

「・・・代表の方と、話がしたいんですけど。何が目的なのか、ど

うしたいのか。私たちに、どうしてほしいのか。命は安いものじゃありません。出来れば、話し合いで終わらせたいんです。そっちだって、自分の仲間犠牲者は出したくないでしょう?」

「・・・復讐だ、と言ったはずだが」

「何の復讐?・・・まあ、二人で別の車両で話しましょう。玄野さんたちも、そちらの方たちも。私たちも、お互いに人質みたいなものです。勝手に戦いを始めたら、私たちも危険な目に逢ってしまうので・・・その辺、考慮して行動してください」

黒服星人たちが、銃を下ろした。

それを確認して、玄野さんたちも銃を下ろし私を見る。

「・・・任せて良いんだね?」

「ええ」

私は、代表（映画の黒服帯にあたる人）と一緒に、車両を出た。

「私たちを殺して、貴方たちはスッキリするかもしれませんが。でも、それでもガンツによるミッションは、終わらないと思いますよ?」

「終わらせる。これ以上仲間の犠牲者は出せない。・・・お前たちは我々の仲間を殺しすぎた」

「・・・殺さずに済むなら、願ったり叶ったりなんですけど・・・」

「・・・それを我々が承諾するとしても？」

「う・・・」

可能性は低い。

この人たちの、私たちやガンツに対する憎しみは、きっと私が想像している以上に強いから。

「・・・確証もなしに、よくこんなことを持ちかけたな。勇気があると称えるべきか・・・いや、無謀なのか」

う・・・無謀って言われた。

「ガンツだって、もうすぐ消えます。あなた方が部屋に来なくなつて、別に変らないはずです」

「どうしてそんなことを言える？」

「まあ、色々あります。未来というか、一つの可能性を知ってるんです」

「・・・未来？」

「貴方たちを倒しても、貴方たちが私たちを倒しても、ガンツは消

えるんですよ」

消えるわけじゃない。

玄野さんが中に入ったことで、他の人間はガンツから解放された。

「消える理由を聞こう」

「ガンツの中に、人間が入ってるんです。その人間の寿命が、ガンツの寿命なんです」

「・・・ガンツの、寿命・・・そんなものがあるのか」

「あります」

信じられないような表情をする星人に、私は即答した。

「・・・貴方たちだって、無駄な戦いは避けたいでしょう？」

「・・・」

彼は考え込むように目を閉じる。

「・・・それを了承したら、どうする気だ？」

「・・・どうする、って・・・」。

「ガンツはお前たちに我々を殺せと命じたのではないのか？」

「・・・」

「・・・相手を殺さずに助かる方法が無いのは、お前たちではないのか？」

・・・ガンツは、確かに彼らを殺せと言った。

だけど、彼らがガンツに二度と関わらないと約束したら、変わる気がした。

だけど、本当に変わるだろうか。

証拠もないのに、こんなことをして・・・。
乗客を巻き込まないのがギリギリなのかな。

「・・・交渉決裂だな」

星人が武器を取り出したので、私は慌てて銃を握った。

「・・・他に、方法は無いんですか？」

「無いのはお前たちだろうか？そして、我々も戦う以外に選択肢はない。交渉の余地も無いだろう」

・・・こんな戦いは、ない方が良くに決まってる。

こんな・・・。

「こんな理不尽な、虚しいだけの戦いは、嫌だよ・・・」

舞、助けて。

私は、それを口にせず走った。

玄野さんたちのところへ。

二十話

「詩織さん？」

慌てて車両に入ってきた私を見て、みんなが不思議そうな顔をした。

「ごめんなさい・・・失敗しちゃいました」

そう伝えると、玄野さんは私を庇うように立った。

彼の視線の先には、さっきまで私と居た星人。

「・・・やれ」

彼の言葉を合図に、星人たちは私たちに武器を向けてきた。
私も武器を手にして、彼らに向ける。

他に方法はないか・・・考えても、何も策は浮かばない。

戦うしか道がないなら、勝たなきゃいけない。

「あーっ」

気合いを入れたつもりなのか、そう叫びながら高橋さんが黒服星人に斬りかかる。

私は、それを確認しつつ目の前の星人を睨んだ。

彼は、どうやら標的を私にしたらしい。

キンッ

「っっっ！」

いきなり刀を振りかざしてきた相手に、私は慌てて対応する。何度も刀をぶつけて、運よく相手に当たっても彼は大したダメージを受けていない。それでも、斬り続けるしか方法は無かった。

「うわっ」

バランスを崩しかけて座り込むと、玄野さんと山本さんの背中に支えられた。

・・・まあ、二人はそんなつもり無かったと思うけど。

「思い出しました。あたし、前にも同じことやってた」

「は？」

「前にもあの部屋に居た。中村さんも、小林さんも」

「え・・・」

呆然とする玄野さんに、星人が刀を振るう。

それを受け止めると、彼は戦いに戻った。

「山本さん、詳しくは後で説明して。今はそれどころじゃないわ」

「分かつ、てます」

刀を受け止めながら言う山本さんを確認し、私も相手を見た。彼は、すでに死んでいた。

「・・・あれ？」

私、致命傷は負わせてないけどなあ……。

「大丈夫だった？」

近くに、坂野さんが立っていた。

「あんた、刺されそうだったのに気付かないんだもの。隙をついておいたわ」

……助かった。

残る星人は、いつの間にか白いブラウスの少女だけ。

華奢に見えた彼女は、見かけによらず強い。

人間を見掛けて判断してはいけけないのは事実だろう、とどつでも良いことが頭を過った。

「あっ！」

「高橋さん！」

一瞬。

隙を作った高橋さんは、背中を斬りつけられた。

「よくもっ」

坂野さんが少女に斬りかかるが、それを軽く受け止めて追い詰め、手にした刀を首筋に押し当てた。

「坂野さんから離れなさい！」

私は、高橋さんが斬りかかる前に少女に斬りかかった。少女は坂野さんから離れ、私の刀を受け止める。

「くっ……！」

重い、と感じた瞬間、私の刀は彼女に跳ね返された。

その次の瞬間、山本さんたち卒業生が、少女に斬りかかった。

三方向から一気に斬りかかれた少女は、今までの余裕そうな顔を一変させた。

焦りを見せながら、ほぼ無傷で対応する。あの三人なら大丈夫だと判断した私は、坂野さんに近付いた。

「大丈夫ですか？坂野さん」

「……大丈夫よ」

強がっている彼女に笑いかけ、私は持っていたタオルで傷口を縛った。

これで、保つと良いけど……。

「……復讐だ」

ふと、少女の声があった。

振り返ると、玄野さんが彼女を見つめている。

「復讐だ・・・先に仕掛けたのは、お前たちだ」

その言葉に、玄野さんは眉を寄せる。

「お前たちはわたしの仲間をたくさん殺した。絶対に・・・許さない・・・」

それきり、少女は動かなかった。

「・・・終わった・・・」

ため息を漏らすと、私の足が消えているのがわかった。
・・・転送だ。

二十一話

部屋に戻ると、タイマーの表示が「99:99:99:99」になっていた。

「全員、無事ですか？」

鈴木さんの言葉に、みんなが頷いた。
良かった・・・坂野さん、無事だ。

ジリリリリリ・・・

採点のベルが鳴り、高橋さんの採点が浮かんだ。

《たかはし 0点 一点くらい取れ》

「無茶言つなよ」

《さくらい 3点 コケすぎ》

「ほっといてくれよ！」

桜井さんが叫んだ直後、採点の表示が消え空中にビームを放射した。

「誰か、来る・・・？」

坂野さんが呟く。

・・・鮎川映莉子だ。

「嘘……」

桜井さんが呟いた。

鮎川映莉子の存在に、誰もが固まる。

「やっぱり来たか、お前も」

「ええ……そうみたい」

中村さんと鮎川映莉子の会話が終わると、ガンツは再び採点が浮かんだ。

「皆さん、気をつけて。この女は、わたしを殺したんだ」

「……お久しぶりです、小林さん」

「あ？」

怒りを抑えている小林さんに、鮎川映莉子は冷静に答える。

「小林さん。覚えてませんか？この部屋。私たちのこと」

「は？」

いきなり話に入ってきた山本さんに、彼はポカンとする。

《こぼやし 0点 記憶、なくしすぎ》

「二年前……私は、貴方を守って戦ったわ」

《なかむら 0点 あの時、強かった》

「山本、鮎川、あんた、それからオレ。二年前、渋谷の裏通りで、黒服星人を倒した」

小林さんが、何かを思い出すように上を向く。

《やまもと 11点 昔も、優秀でした》

「そして、みんなここを卒業。記憶を消されて解放された」

「は……はい」

「百点メニューで、本当に解放されるんだ」

桜井さんが嬉しそうに言った。

《すずき 17点 トータル101点》

「え……」

自分の点数に、鈴木さんは固まっていた。

「百点……」

その言葉に答えるように、ガンツは百点メニューを表示する。

「解放ですよ、鈴木さん！これで自由になれるんすよ！」

「二番を選びます」

「は？」

中村さんが、すつとんきょうな声をあげた。

「……加藤くんを生き返らせましょう」

「……わたし、この男に殺された。『復讐だ、お前たちは仲間を殺した』……って言って」

鮎川映莉子が指差したのは、マツケン……加藤勝の写真。

「さっきの星人と、同じこと……」

山本さんが呟く。

「ガンツ。加藤勝くんを生き返らせて下さい」

ガンツの表示は写真から点数に変わり、鈴木さんの点数が一点に減った。

その直後、写真が再び現れる。その写真から、加藤さんのだけが消えた。転送と同じように光が現れ、加藤さんが現れた。

「ケイちゃん……千手は？」

「千手は居ません」

私が答えると、彼は驚いたように私を見た。

「……どちら様？」

「村上詩織と言います。初めまして、加藤勝さん。千手のミッションから、5ヶ月が経過しています」

「5ヶ月・・・？」

呆然とする加藤さんに、玄野さんは抱きついた。

「死んでたのか、俺は」

「はい。鈴木さんが、百点メニューで貴方を生き返らせたんです」

「鈴木さん・・・ありがとうございます」

加藤さんと玄野さんが、頭を下げる。

「いえ。最初から、百点を取ったら加藤くんを生き返らせようと思っ
めてたんです」

そう言う鈴木さんの後ろで、ガンツは私の点数を表示した。

「ちよ、漫らせるよバカ。・・・え？」

《しおり 5点 トータル106点》

二十二話

百点メニューが表示された。

「……他に、百点を取ってる人居る？」

《くろの 21点 トータル115点》

「玄野さんだけ？」

《だけ》

「……玄野さん。生き返らせましょう、二人。どなたが良いですか？あ、ガンツ。選択権加藤さんと玄野さんに渡しますから。私選べないし。……ってわけで二人で決めて下さい」

「え、俺!？」

「はい、そうです」

「……ケイちゃん、どうする？」

「俺は、西を生き返らせる」

「……岸本さん、お願い出来るか？」

二人は私を見た。

え、岸本さん？あのナイスバディ？わお、お会いしたい。

「分かりました。ガンツ、玄野さんは西さん、私は岸本さんを生き返らせる」

二つの光線が現れ、二人が現れた。

「え・・・？」

「は？」

二人がきよとんとする。

岸本さんは、玄野さんと加藤さんを見つけて安心したように駆け寄ってきた。

「オレ・・・」

「生き返ってもらったよ」

玄野さんは、西丈一郎に向かって歩いて行った。

「初めまして、岸本さん。村上詩織です」

「あ、岸本恵です。よろしくお願いします」

握手をすると、私は西丈一郎に近付いた。
考え込んでる彼に、手を差し出す。

「村上詩織です。よろしく、西丈一郎さん」

「・・・よろしくする気はねえな」

・・・言つと思つた。

「まあ、勝手によろしくしちゃいますから」

「ケツ」

鼻で笑つたあと、西さんは玄野さんを見た。

「ガンツの電池切れだな」

「電池で動いてたんですか？」

鈴木さんが聞く。

「違う。俺の推理では・・・ま、見たまんまだけどさ。ガンツって、この中のやつエネルギーを吸って動いてる」

「それって、その人が死んだら」

「ガンツもゲームオーバー、ってこと」

「ガンツが死んだら、私たちどうなるんですか？」

玄野さんに説明されたいらしい岸本さんが、西さんに聞く。

「そりゃ、ねえ？」

「消滅、でしょ？」

淡々と言う鮎川さんに、周りは顔色を失う。

「ガンツは私たちが死んだところを狙って部屋に連れてくる・・・
私たちは、ガンツに生かされてるから、ですか？」

私の言葉に、西さんが興味深そうに私を見た。

「私たちは、本当はまだ死んでいる。生きたふりをしている、動ける死体・・・。生きたふりをさせる力を持ち、動ける死体に命じて星人を殺させるのが、ガンツですか？」

「正解。頭良いな、意外と。バカ面に見えたけど」

失礼だな。

「百点を取れば、完全に生き返る選択肢もある。それを選択したのが、彼女たち 卒業生、ってことですよね」

「ああ」

「でも、どうして卒業生を呼び出したの・・・？西さんは、何故だと思えます？」

「・・・寿命が来る前に、星人を倒したいんだろ」

「・・・流石」

私は、小さく呟いた。

「流石？俺のことをほとんど知らない人間の言葉には聞こえないな」

「そりゃそうですね。私は、大体のことは知ってます。．．．玄野さんと加藤さんが酔っぱらいを助けて電車で跳ねられたことも、岸本さんが風呂場で手首を切って自殺し、全裸で部屋に来たこと。ネギ星人の戦いも、千手観音の戦いも知ってる。理由は教えられませんが、玄野さんと鈴木さんは知ってます」

「．．．」

「そして、次のミッションのターゲットも．．．ガンツ、当ててあげるわ。小島多恵。そうでしょ？」

途端、現れた星人。

玄野さんが固まった。

「．．．当たってる．．．ってというか、普通の女の子じゃない！」

坂野さんが叫んだ。

「というか、好きなものって．．．」

鈴木さんの言葉に、私以外の視線が玄野さんに向けられた。

「なんだよこれ．．．おい、何で彼女がターゲットなんだよ！やるなら偽物の加藤だろ！？」

「私も同感。彼女を殺しても、彼らの復讐心は消えたりしないわ。結局、何も解決しない。だったら、可能性が低くても加藤さんの姿をした星人を倒すべきだと思うわ」

「そうなるってことか？」

西さんが問う。

「ええ。・・・私は未来を知ってる。だけど、その未来に私は存在しない。坂野さんは成人に殺されたし、岸本さんはこの時点ではまだ死んだままなの。・・・ガンツ、ターゲットを偽物の加藤さんに変えてくれないかしら。そうすれば、他の星人も諦めるわ」

《かえない》

「玄野さんを闘わせたいからって、その彼女をターゲットにする必要は無いわ。違う？多恵さんは何も知らないし、何もしてない。何も悪くない。そんな人間をターゲットにするなんて、どうかしてるわよ。今すぐ変えて」

《かえない。しつこい》

「・・・そう。じゃあ、私と玄野さん、加藤さんを先に転送してちようだい。加藤さんは自宅に行かせてあげて。弟としばらく会ってないから」

「・・・ありがとう、詩織さん」

そういう彼に微笑むと、私は転送されていた。

二十三話

「ここは・・・」

「オレの家だよ」

「玄野さん、メモ帳と書くもの貸して下さい」

「こんな時にか？」

「こんな時、だからですよ」

不思議そうな玄野さんからメモ帳と書くものを借り、私はペンを走らせる。

「行きましょう。多恵さんは家の前に居ます」

言いながら玄関を開けると、多恵さんはドアの横でしゃがみこんでいた。

「玄野くん・・・と、詩織さん？」

「お久しぶりです。事情は後で説明します。今は一緒に来て下さい」

玄野さんが、多恵さんを立たせる。

「私、地下鉄に乗ろうとして。でも、途中で降ろされて。何事かと思ったら、玄野くんが居て・・・」

外から見ていたか。

舌打ちしたい気持ちを抑えると、足音が聞こえた。後ろを見ると、加藤さんが居る。でも、スーツを着てない。

玄野さんは、多恵さんを背負うと私を見た。

加藤さんが刀を出す。

私は玄野さんの部屋に戻り、窓を開けた。その後、玄野さんが窓から飛び降り、着地した。

瞬間、寒気がする。

振り返ると、偽物の加藤さんが居た。

「・・・彼女に、何か用ですか？」

「邪魔をするな。命は惜しいだろう？」

「残念でした。惜しくないの、私は」

嘘ではない。

死ぬことに、恐怖を感じてはいなかった。

一度死んでいるからだろうか。

「動くな！」

声に振り返ると、重田さんが立っていた。

彼は、銃口を偽物の加藤（偽物なら敬意を払う必要もない）に向ける。

私は重田さんに駆け寄り、その腕を掴んで玄関を出た。

そのまま飛び降り、着地する。

「お、おいおい・・・」

「あ、すみません。急いでるので」

私は、そのまま重田さんを担いで走り出す。後ろには、もう偽物の加藤が近づいていた。

「彼は例の偽物か？」

「はい。当たりです。死にたくなかったら黙ってて下さいね！」

私は一軒家の屋根に飛び乗る。

バランスを崩しかけながら、私は屋根から屋根へと跳び移っていく。

「あ」

玄野さん、発見。

鈴木さんも一緒だ。

「玄野さん！」

私が叫ぶと、二人が振り返った。

玄野さんに背負われた、多恵さんも私を見ている。

「・・・彼は？」

「重田さん。ガンツを調べてる刑事さん。私のことは知らせてある。・・・多恵さん、これを」

私は、重田さんを軽く紹介して多恵さんにメモを渡した。

「私の自宅の住所です。この先、私たちはきつと死にます。このことを忘れて、生き返りますが。記憶が戻ったら、ここに来てください。多分、私も記憶を失ってるから、自己紹介からやり直すことになりますけど」

「・・・良く分からないけど、分かりました。お預かりします」

多恵さんは、不思議そうに頷いた。

これで、映画通りに進んでも何とかなる筈だ。ホッとした私は、重田さんを地面に下ろした。

「重田さんは、歩くんところに。多分、本物の加藤さんもこちらに来ますので。鈴木さんと多恵さんは、出来るだけここから離れてください」

「分かった」

「分かりました。・・・多恵さん、行きましよう」

重田さんは現在地を確認してから加藤さんの自宅に向かい、鈴木さんは多恵さんを背負って重田さんとは別の方向に走る。

それを確認していると、背後に気配を感じた。

「なっ……」

偽物の、加藤。

「いつの間に……」

私は、慌てて屋根に飛び移る。

「大丈夫？」

「問題ありません」

そう答えて、銃を構えた。

二十四話(前書き)

更新、遅くなりすみません。

二十四話

「戦うほかに、何か方法はありますか？私たちだって、好きで星人を殺してる訳じゃありません」

偽物の加藤（以後、加藤星人）に聞くが、それに反応はない。

「・・・仕方ありませんね」

私がつめ息をつくと同時に、加藤星人が切りかかってくる。反応が遅れた私の前に出て、玄野さんが刀を受け止める。私は軽くジャンプして下がると、二人はすでに戦いを始めていた。

「・・・さて、と」

これからどうしよう。

この後本物の加藤さんが現れて、二対一の戦いに発展していくはずだ。

私がいても足手まといになるだけ。

一瞬考えて、私は多恵さんを追うことにした。

見つけたとき、二人は他のメンバーから隠れていた。
私は、メンバーに近づき声をかける。

「あの。玄野さん見ませんでした？」

「はあ？アンタ一緒にいたでしょ」

「それが、逸れちゃったみたいで。・・・加藤さんは？それから、鈴木さんも」

「知らないわよ」

鮎川さんが答える。

じゃあ、鈴木さんの居場所はまだ、バレてないってことか。

「・・・アンタを人質にすれば、出てくるかもしれないわね」

「え、人質！？やですよそんなの！」

「人質になるのが好きな人間なんているわけないと思いますけど？」

山本さんがいう。

最もだけど、今言うことじゃないでしょーが！

「さ、行くわよ」

鮎川さんが、私に銃を向けた。

・・・この展開は予想してなかったなあ。

二十五話

「……誰も出てこないわね。ここには居ないのかしら」

「居ても出てこない、という考えは浮かばないんですか？」

「味方なんですよ？貴女たちは」

「……まあ、そうだけど。」

私は、今に飛び出してきそうな鈴木さんを見つめた。出てきては、いけない。

だって、ここであの人が出たら、戦いになる。

中村さんが死んで、鈴木さんも戦えなくなってしまうはずだ。

そうなれば、多恵さんは玄野さんのところへ向かう。

……出来ることなら、救いたい。

「何、黙ってるのよ」

「ギヤーギヤー喚くのも疲れるので。……というか強く掴みすぎです。痛いんですけど」

「このくらいしなきゃ、逃げるでしょ。スーツの力、甘く見ないでちょうだい」

そこまで怪力になるってことか？

そんな会話をしながら路地を出ると、後ろで多恵さんの心配そうな視線を感じた。

……優しい人だ。

玄野さんも、素直になってとっとくつつけば良いのに。

「ところで、お前いつから居るんだ？卒業生じゃなさそうだし」

不思議そうな顔をして聞いてきたのは、西丈一郎。

「・・・山本さんが来る、もうちょい前に」

「へえ・・・じゃ、結構星人退治は慣れてるってことか。なら、何故戦わない？星人は殺せても、人間は殺せないってか？」

とんだ甘ちゃんだな、と鼻で笑う。

「・・・いけませんか？」

「普段なら構わないんじゃないか？・・・だが、今はそれじゃ駄目だろ。戦いをやめちゃ、死ぬだけだぜ？」

一度死んだお前に言われても説得力ねえよ。

口が裂けても言えないので、心の中にとどめておく。

「まあ、良いか。どうせここまでなんだし」

「・・・殺しても、得点にはなりませんよ？」

「邪魔をする奴は消す。それだけさ。点数なんて関係ないね」

うわ、最悪。

どうにかして逃げたら何とかならないかしら。

「逃げようなんて思わないことだな」

読まれた……。

「どうして、多恵さんを殺そうとするの？」

「得点を取らなきゃ、私たち消滅しちゃうんですよ？彼女を殺せば、100点取れるんです。その点数でもう一度解放されれば、私たちは助かるんです」

「自分が助かるためなら、誰を犠牲にしても構わないって言うの？」

私の言葉に、山本さんは口をつぐんだ。

「でも、その一人のために死ぬのはお断りよ。多恵という人には悪いけど、死んでもらうわ」

鮎川さんの言葉に、息を飲んだ。

「……まあ、良いわ。この場に居ないなら、居場所を探せばいいんだから。……さっさと行くわよ。こんな路地、居ても時間の無駄なもの」

その言葉で、私たちは路地を後にした。

……心配そうな、二人を残して。

私が連れてこられたのは、玄野さんと加藤さんのところだった。
そこには、今まで見当たらなかった岸本さんが居る。

「どういう状況ですか？これ・・・」

「偽物ってヤツを倒して女を助ける算段だろうな。・・・そいつを倒したところで、助かるとは思えないけど」

山本さんの問いかけに、西さんが答えた。

「加勢します。離して下さい」

「あつちに加勢されちゃ困るわ。私たちが危ないもの」

「この期に及んで何を・・・」

「まあ、良いわ。・・・どうやら、終わりみたいね」

ふと、視線を前に戻す。

そこでは、偽物の加藤に加藤さんが刺されたところだった。

「か、加藤さん！離して下さいっ！」

いくら助かると分かっているけど、見てもらえない。

「ダメって言ったはずだけど？」

こうなったら、自分で拘束を解くしか方法は……。

「むうーっ」

ジタバタしてみるが、彼女の手がゆるむ気配は無い。

「無駄だって分かっているのか？」

西さんが、呆れてため息を吐いた。

「ちょっと相手してくるから、その女しっかり捕まえといてくれよ？」

西さんが、そう言って偽物の加藤に駆け寄る。

その瞬間、彼は殺された。

「西さん……」

分かっていたが、人が死ぬのは何度見ても辛い。

星人なら良いのか、と問われると、どっちもどっちだ。

でも、どっちが辛いかと聞かれたら、それは人間の方が見てて辛い。自分も、人間だから。

「多恵って女、死んだみたいね」

鮎川さんが、軽く言う。

「多恵さ……」

多恵さんの死体に縋る玄野さんを見ていらなくて、下を向いた。気付くと、足が消えている。

「ガンツ……そんなにしてほしければ、喜んで星人を殺してやるわよ」

これ以上、悲しい思いをする人を増やすのは嫌。絶対に星人を倒して、玄野さんが中に入らずに済むようにしてやるわ。

そんな決心をしつつ、私は部屋に戻っていた。

二十六話

部屋に戻ると、玄野さんが蹲っていた。
・・・先に戻っていたのか。

「玄野さん・・・」

掛ける言葉がない。

そんな重苦しい空気の中、いきなり武器ラックが閉じた。
直後、部屋の電気が消えて真っ暗になる。

「こんな部屋で、停電？」

山本さんが、不思議そうに呟いた。

「違うわ・・・見て、ガンツが・・・」

鮎川さんの言葉で皆が振り返ると、そこには光が集まった。

《くちい、くちい、くちい、くちい》

「くちい・・・違う、くさい？え、臭いつて・・・臭うんですか？
僕らが？酷いですよ、必死に戦った結果なのに」

「違うと思いますよ、鈴木さん」

慌てて匂いを嗅ぐ鈴木さんを、加藤さんが止めた。

《誰かやっつけて下ちい。ここにいる星人。》

特徴：誰かとソックリ」

中村さんが、慌てて辺りを見回した。

「・・・ここに？」

鮎川さんが、すぐさま加藤さんに銃を向ける。

私は、二人の間に入って首を横に振った。

「さつき、私たちの目の前で星人に殺されたのは誰ですか？」

それは、西さんだ。

「座標は突き止めた」

突如、部屋の奥から声が聞こえる。

西さん・・・違う、西さんの身体を奪った千手だ。

刀を振りかざされ、私は慌てて防御に入る。

「千手・・・」

加藤の言葉を合図に、加藤さんと私、そして玄野さん以外が銃を向ける。

引き金を引こうとしたその瞬間、千手の背後に黒服たちの集団が現れた。

「戦いを望んだのは貴様らだ」

自分には罪はない、と言い張る千手の言葉を合図に、背後の黒服たちが銃を構えた。

何とも言えない空気の中、私たち以外が銃を向けて睨み合っている。
私は、戸惑いながら銃を構えた。
何もしなければ、死んでしまうからだ。

《はじめ》

そのガンツの表示を合図に、銃撃戦が始まった。
何も考えず銃をどんどん撃っていく。

「いつ……！」

星人の弾がいくつも当たって、足から崩れてしまった。
痛い。でも、多恵さんを目の前で殺された玄野さんが、ずっと
痛いに決まってる。

私は、しゃがみ込んだまま銃を撃ち続けた。
そんな中、千手が何か液体をガンツに振りかけているのが見えた。

「なっ……！」

あの液体が何なのか、分からない。
黒いから、墨汁かもしれない。
危ない薬品かもしれない。
そんなの、私にはどうでもよかった。
急いで千手に掴みかかるが、遅かった。
ガンツが、爆発したのだ。

「うっ……」

私は、そのまま気を失った。

目を覚ますと、ガソツの前で玄野さんと加藤さんが立っていた。その奥で、千手が倒れている。

「玄野さん、加藤さん……」

「詩織さん……無事だったんだね」

起き上がるうとすると、加藤さんが手伝ってくれた。

「ありがとうございます」

「大したことはしてないよ。……歩ける？」

「はい」

私は、玄野さんが倒れているところに歩いた。

「玄野さん……その傷、千手にやられちゃったんですか……」

「まあね……どうやら、詩織さんの言った通りになりそうだよ。多恵ちゃんのこと、お願いしても良いかな？……記憶は、消えてしまっけれど」

「私の記憶も？」

玄野さんが、悲しげにうなずく。

「ごめん・・・一人の記憶だけ残しておく方法を、ガンツも俺も知らなくて」

「・・・ごめんなさい、助けられなくて」

玄野さんがガンツに入らなくて済むようにしたかったのに。

私は、結局何もできなかった。

私は・・・無力だ・・・。

「大丈夫だよ・・・俺は、少しでも詩織さんたちと居れて良かったと思ってる。お陰で、犠牲者は減っているんだし・・・そんなに気に病む必要は無いよ」

「・・・どういう意味だ？」

黙って聞いていた、加藤さんが私に問いかけた。

「私は、異世界から来たんです。ガンツの存在、メンバーの存在、千手のこと、黒服星人、多恵さんが狙われたこと・・・私の中では決定された未来でした。でも、それを変えたかった。星人を殺すという行為を辞められなくても、多恵さんは殺さずに済むようにしたかった・・・でも、ガンツはそれを、許してはくれなかった・・・」

「・・・それで、俺たちのことを知ってたのか」

「このことは、玄野さんと鈴木さん、そして加藤さんしか知りません。誰にも言うなどは言いません。でも・・・加藤さん、足が・・・」
消えてる。

「え？・・・ケイちゃん・・・？何をしたんだ、おい！」

慌てて玄野さんを抱き上げる加藤さんを見てられなくて、下を向く。

「ごめんな、二人とも。・・・加藤、歩くと幸せにな？」

「なっ・・・」

「嬉しかったよ。子どもの時のこと、覚えててくれて。でも・・・忘れてくれ、もう。こんなこと、忘れた方が幸せに決まってる」

「何言ってるんだ！ケイちゃん！」

何度も玄野さんの名前を叫びながら、加藤さんは部屋から姿を消した。

「・・・詩織さん、ごめん」

「良いんです・・・どこかで、こうなることは分かっていたんです。変わらないって、どこかで思ってた・・・だから、仕方ないのかもしれない」

「・・・元気でね」

その言葉が終わる前に、私の意識は消えていた・・・。

二十七話

目を覚ますと、布団に入って眠っていた。

「うー．．．ん．．．え？」

自分の家じゃない。

「何．．．ここ、何処．．．？」

「んー．．．詩織ちゃん？起きたの？」

「え．．．」

この人は．．．誰？

どうして、私はこの人の隣の布団で眠っていたの．．．？

「どうしたの？詩織ちゃん」

「貴女は．．．誰ですか？」

「え．．．」

女の人が、呆然とする。

「どうしちゃったの．．．？詩織ちゃん．．．」

私は、呆然とすることしか出来ない。

「・・・覚えてないの？」

「覚えて・・・え・・・あの・・・どちら様か、名前を伺っても？」

「松村百合子よ。貴女は、村上詩織よね？」

「ええ、そうです。・・・松村百合子・・・失礼ですけど、どういう関係ですか？私と」

「えっと・・・居候なのかしら、詩織ちゃんは」

「居候って・・・私、ちゃんと家ありますよ？」

「でも、初めて会った時、帰るところが無いって言ってたわよ？」
「家族に何かあって、家に住めなくなったんじゃないかと勝手に想像したけど・・・」

「両親なら元気なはずですよ・・・ちよつと、電話借りますね」

私は、電話を借りて自宅に電話を掛けた。
とにかく、この人が何なのかきちんと聞かないと。

《お掛けになった電話番号は、現在使われておりません。番号を「
確認の上、もう一度おかけ直しください》

「あれ・・・ボタン押し間違えたかな」

もう一度、ボタンを押す。

《お掛けになった電話番号は、現在使われておりません。番号を「

確認の上、もう一度おかけ直してください》

「そんな……」

べつして。

「……どうしたの？電話、留守電？」

「だと良いんですけどね……」

番号が存在しないなんて……どういふことだろう。

「……私は、ここで生活してたんですか？」

「ええ。料理を担当してくれていたわ」

そんな話を聞いたせいで、お腹が「ぐうー」と鳴ってしまった。

「……取り敢えず、朝食作りますね。私、担当だったんでしょう？」

「ええ。今日はなめこの味噌汁って言ってたわ」

「じゃあ、それにしましょう」

冷蔵庫を開けて、材料を確認する。

「……今日は白米と、味噌汁と、鮭の塩焼きですね」

元々そう聞いていたのか、松村さんは小さく頷いてパジャマから私

服に着替え始めた。

え。生着替え見る趣味無いよ。

私は、慌てて眼を逸らし、料理に専念することにした。

二十八話

「記憶喪失なら、病院行った方が良いけど・・・貴女の保険証、何処にある？」

「え？・・・自宅だと思います」

「そつかあ・・・じゃあ、病院行けないわね・・・あ、でも値段が高くなるだけで行けないわけじゃないのか。・・・でも、記憶喪失じゃないと思うんだよなあ・・・うーん」

百合子って人が、一人で唸り始めた午前8時。家のチャイムらしき音がした。

「あ、はい」

やっぱりチャイムだったか。

「はい、どちら様・・・どちら様ですか？」

「あの、ここに村上詩織さんって居ますか？」

「居るけど・・・」

私の、知り合いが来ている？
取り敢えず、玄関まで歩いた。

「あ。詩織さん。・・・私のこと、分かりますか？」

「吉高・・・由里子さん・・・?」

え、芸能人だよな?

何で私のこと尋ねにここまで来てるの!?

「あの、私小島多恵って言います。・・・詩織さんに、この住所を教えていただいて来ました」

「私が、住所を教えた?ごめんなさい、今記憶喪失っぽくて・・・え?」

今、なんて言ったの?

「小島多恵って・・・本名ですか?」

「はい、本名です。・・・すみません、詩織さんと出かけても構いませんか?」

「え?・・・ここで話して行ったら?私、そろそろ仕事で行かなきゃいけないから」

「ありがとうございます」

百合子という人は、荷物を持って家を出て行った。

「・・・小島さん、あの・・・」

「詩織さんは、玄野くんのご存知ですよ?」

玄野って・・・玄野計?

「覚えてないみたいなので、私が知ってることを説明しても良いですか？」

私が頷くと、小島さんが口を開いた。

「・・・私は、玄野くんから貴女が異世界から来た人だって聞ききました。そして、自分たちの未来を知っていたと。私が戦いに巻き込まれることも、詩織さんから聞いたみたいです。玄野くんのこと、他の人に聞こうと思ったんですけど・・・他の人たちが、何処に住んでいるのか分からなくて。黒い服・・・玄野くんと同じ服を着ていた人たちの中で、住所がわかったのは詩織さんだけだったんです。詩織さんに、住所を聞いていたので」

「どうして、私が・・・？」

「私は、一時的に玄野くん・・・ケイちゃんのことを、忘れてたんです。でも、何故か大切なことを忘れていたような気がして・・・それで、思いだしたんです」

「・・・そうですか」

沈黙が訪れた。

「・・・え？ちよつと待て。」

「あの、私は・・・玄野計とお揃いの服を着てましたか？」

「はい。着てました。それと、警察の人と一緒に居たんですけど・・・」

玄野計が着ていた、ガンツのスーツを着ていた。

つまり、私はいつからかミッションを行い、そして玄野計によって記憶を消されたのだろう。

警察の人って・・・そう言えば、ガンツを追ってた刑事さんが居たみたいだし、その人のことかな・・・。

「重田さん、って呼んでました」

私は固まった。

・・・絶対ソイツだーっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1399t/>

GANTZ PERFECT ANSWER and the sequel to a movie

2011年11月17日12時32分発行